

# 安田(2)遺跡

—東北縦貫自動車道八戸線（青森～青森）建設事業に伴う遺跡発掘調査報告—

1999年3月

青森県教育委員会



## 序

青森県教育委員会では、東北縦貫自動車道八戸線（青森～青森）建設事業に伴う安田(2)遺跡が、事業予定地内に所在していることから、記録保存を図るために、平成9年度に発掘調査を実施しました。

今回の調査により、縄文時代・弥生時代・平安時代の遺構や遺物が発見されました。

本報告書は、この発掘調査の成果をまとめたものであり、いささかでも今後の文化財の保護及び活用に資するところがあれば幸いに存じます。

最後になりましたが、調査の実施と報告書の作成にあたり関係各位から御協力・御指導を賜りましたことに対して、心から感謝の意を表します。

平成11年3月

青森県教育委員会

教育長 松森 永祐



## 例　　言

- 1 本報告書は、平成9年度に東北縦貫自動車道八戸線（青森～青森）建設事業に伴い実施した青森市安田(2)遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡は、平成10年3月に青森県教育委員会が編集・発行した『青森県遺跡地図』に、遺跡番号01016として登録されている。
- 3 本報告書は青森県埋蔵文化財調査センターが編集・作成した。なお、執筆者の氏名は文末に記した。
- 4 本書に掲載した地形図（遺跡の位置）は、建設省国土地理院発行の5万分の1の地形図を複写したものである。
- 5 掘図の縮尺は、各図ごとにスケールを付した。なお、遺物写真の縮尺は不同である。
- 6 石質の鑑定は青森県立板柳高等学校教諭 山口義伸氏に依頼した。
- 7 堆積土層等の色調観察には、『新版標準土色帖』（小山正忠、竹原秀雄 1996）を用いた。
- 8 掘図に付した北の方位は、すべて座標北である。
- 9 積穴住居跡の規模は、四壁で行った。床面積は壁の下端で閉まれた部分をプランメーターを使用して計測し、3回の平均値を用いた。遺構内のピットの深さについては、掘図中に斜字イタリック体で記した。
- 10 遺物の計測値は、（計測値）で残存最大値を示している。
- 11 須恵器は断面図を塗りつぶした。
- 12 発掘調査における出土遺物・実測図・写真等は、現在、青森県埋蔵文化財調査センターで保管している。
- 13 掘図中で使用したスクリーントーンは以下の通りである。

地　　山  
No.204



鉛土/土器等の炭化物  
No.320



土師器内面墨色處理  
No.52



礫石器敲打痕  
No.123



礫石器すり痕  
No.784



羽口被熱範囲  
No.122



羽口被熱範囲  
No.112



# 目 次

序

例言

目次

第1章 発掘調査の経過.....	1
第1節 調査要項.....	1
第2節 調査方法.....	1
第3節 遺跡の基本層序.....	5
第2章 検出遺構と出土遺物.....	6
第1節 竪穴住居跡.....	6
第2節 土坑.....	13
溝状土坑.....	13
土器埋設造構.....	13
焼土遺構.....	13
第3章 遺構外の出土遺物.....	15
第1節 土器.....	15
第2節 土製品.....	27
第3節 石器.....	28
第4章 まとめ.....	34
引用・参考文献.....	34
写真図版.....	35
抄録.....	43

## 図版目次

図1 遺跡位置図	
図2 調査区域及び遺構配置図	3
図3 基本層序	5
図4 第1号住居跡と出土遺物	7
図5 第1号住居跡出土遺物	8
図6 第2号住居跡	9
図7 第2号住居跡カマド・遺物の出土状況	10
図8 第2号住居跡出土遺物1	11
図9 第2号住居跡出土遺物2	12
図10 土坑・溝状土坑・土器埋設遺構・焼土遺構	14
図11 遺構外出土土器1	18
図12 遺構外出土土器2	19
図13 遺構外出土土器3	20
図14 遺構外出土土器4	21
図15 遺構外出土土器5	22
図16 遺構外出土土器6	23
図17 遺構外出土土器7	24
図18 遺構外出土土器8	25
図19 遺構外出土土器9	26
図20 遺構外出土土製品	27
図21 遺構外出土石器1	30
図22 遺構外出土石器2	31
図23 遺構外出土石器3	32
図24 遺構外出土石器4	33

## 写真図版

写真1	35
写真2 第1号住居跡と出土遺物	36
写真3 第2号住居跡と出土遺物	37
写真4 土坑・溝状土坑・土器埋設遺構	38
写真5 遺構外出土土器1（縄文時代）	39
写真6 遺構外出土土器2（縄文時代）	40
写真7 遺構外出土土器3（弥生時代）	41
写真8 土製品と石器	42

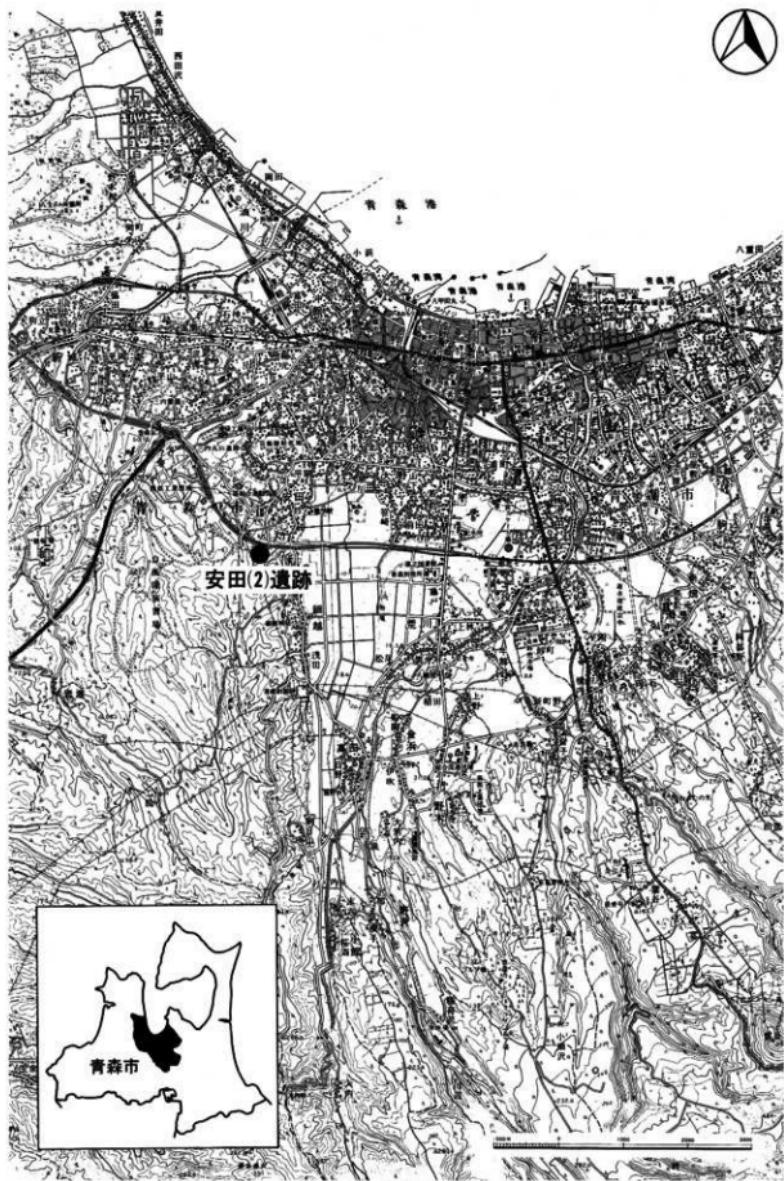


図1 遺跡位置図

# 第1章 発掘調査の経過

## 第1節 調査要項

### 1 調査目的

東北縦貫自動車道八戸線（青森～青森）建設事業の実施に先立ち、当該地区に所在する青森市安田(2)遺跡の発掘調査を行い、その記録保存を図り、地域社会の文化財活用に資する。

### 2 発掘調査期間

平成9年5月2日から同年7月31日まで

### 3 遺跡名及び所在地

安田(2)遺跡（青森県遺跡台帳番号 01016）

青森市安田字近野1-10、外

### 4 発掘調査面積

23,600平方メートル

### 5 調査委託者

建設省東北地方建設局青森工事事務所

### 6 調査受託者

青森県教育委員会

### 7 調査担当機関

青森県埋蔵文化財調査センター

### 8 調査協力機関

青森市教育委員会、東青教育事務所

### 9 調査参加者

調査指導員 市川 金丸 青森県考古学会会長（考古学）

調査協力員 池田 敬 青森市教育委員会教育長

調査員 遠藤 正夫 青森市社会教育課埋蔵文化財対策室室長（考古学）

山口 義伸 青森県立板柳高等学校教諭（地質学）

調査担当者 青森県埋蔵文化財調査センター

調査第二課

総括主幹・調査第二課長 鈴木 克彦（現、青森県立郷土館 学芸主幹）

主 幹 岛山 昇

主 事 工藤由美子

調査補助員 金枝鉄明、藤谷麻美、小山朋子、竹内真紀子

## 第2節 調査方法

### 1 調査区の設定

国土座標 X = 88,200・Y = -10,300（図2-調査区域及び遺構配置図参照）の軸を基点に 4 m × 4 m のグリッドを設定した。グリッドの呼称は、東から西方向へ算用数字を、南から北方向へローマ数字とアルファベットの組み合わせを付し、その組み合わせで呼称した。グリッド名は、南東隅の杭を使用した。ただし、ローマ数字の後に付すアルファベットは5の倍数であるYまでとし、I Yの次はII

Aとした。

標高原点は、調査区域外に設けられていた工事用測量杭（図2－青2K6）H=65.398mからレベル移動し、調査区域内の任意の場所に必要に応じて設定した。

## 2 発掘方法

遺構の精査は四分法及び二分法により、土層観察のためのベルトを設けて行った。実測は簡易造り方測量によるものとした。遺構の実測図の縮尺は、10分の1・20分の1を必要に応じて使用することとした。遺構の番号は種類ごとの確認順に付した。

土層の名称は、基本層序については表土から下位にローマ数字を付し、細分される土層はさらに小文字のアルファベットを附加した。遺構内の堆積土については上位から下位に算用数字を付した。土層観察に当たっては、「新版標準土色帖」（小山正忠、竹原秀雄 1996）を用いて注記した。

写真撮影は適宜行うこととし、主としてカラーリバーサル及びモノクロームの2種類のフィルムを用いた。ただし、遺構や遺物の状況に応じてカラープリントやポラロイドカメラも使用した。

遺物の取り上げは、グリッド単位あるいは遺構ごとに行った。

## 3 調査の経過

4月3日に現地を下見し、プレハブ及び駐車場用地の選定、電気・電話・水道が引けるかどうかの調査等を行った。4月10日に現地にて原因者と、買収区域及び調査区域の確認、立木の伐採、上物の撤去、杭打ち等についての打ち合わせを行った。今年度の調査は、調査区を東西に走る農道から北側が調査区域であるが、できれば買収の終わっている農道の南側も調査して欲しいとのことであった。

4月中に上物は原因者により撤去され、プレハブ・駐車場予定地を整地して、プレハブを設置し、電気もプレハブまで引けるよう工事が行われた。

5月2日から発掘調査が開始した。当センターから器材を運び込み、環境を整備し、現場の発掘調査が始まった。

まず、遺跡全体における遺構・遺物の分布範囲を探るため、試掘坑を設けて試掘先行方式で行った。その結果、早い段階で、本遺跡が削平によりかなり壊されていることがわかった。結局、農道から北側では、焼土状遺構1基を検出したのみで、遺物も少なかった。

5月末には、農道南側の調査を開始した。遺構は住居・土坑・溝状土坑・埋設土器遺構（縄文時代）を検出した。

6月20日に原因者・及び日本道路公団・県教育庁文化課の方と今後についての打ち合わせをし、7月いっぱいまで本遺跡の調査を終え、隣接する三内丸山(6)遺跡の調査に入ることとなった。

7月の半ばに、調査区南西側で平安時代の住居を検出したが、大部分は調査区域外であったため、今年度は遺構の一部分の調査となつた。

7月18日には空中撮影を行つた。

7月29日より、遺構の精査と並行して移転の準備を始め、7月31日に器材を三内丸山(6)遺跡のプレハブに運び込み、安田(2)遺跡の調査は終了した。

(工藤 由美子)

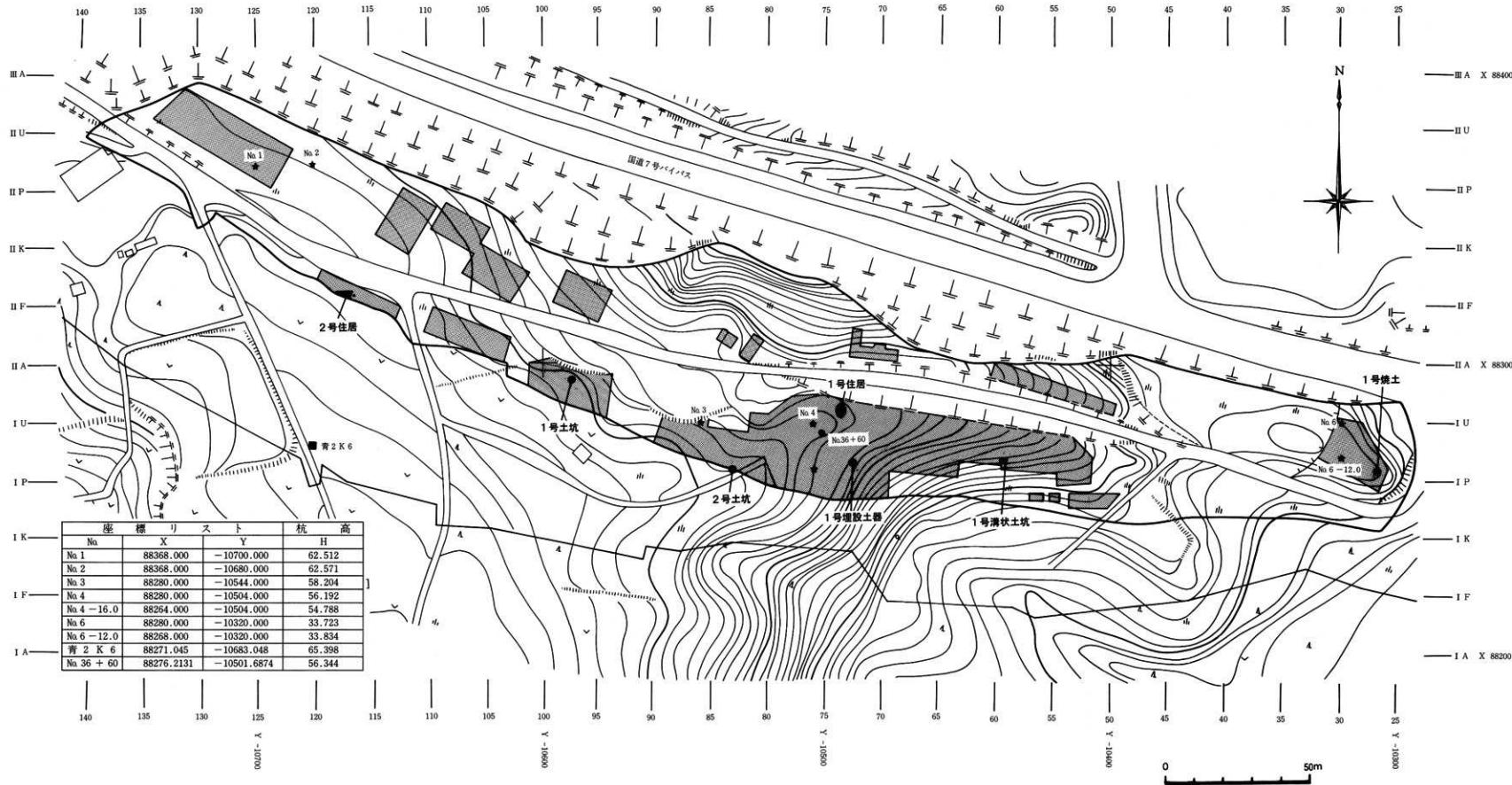


図2 調査区域及び遺構配置図

### 第3節 遺跡の基本層序

本遺跡では、調査区中央のトレンチ内北側の壁面（II H-95）と調査区南側調査区域壁面（I R-86）の土層を基本層序とした。

各層位は以下の通りで、本調査の調査員である青森県立板柳高等学校教諭 山口義伸氏が分層し注記したものである。

盛土

第Ⅰ層 黒色腐植質土（10YR2/1）

表土でしまりに欠け、全体的にソフトである。粘性・湿性多少あり。乾くと黒灰色に変化し、格子状に割れる。平均的に10cm程である。

第Ⅱ層 黒褐色土（10YR2/3）

多少堅さ・しまりはみられる。粘性・湿性多少あり。軽石粒・ローム粒の混入が多少認められる。本層中に白頭山-苔小牧火山灰（B-Tm）のブロック状の混入が認められる。

第Ⅲa層 黒色腐植質土（10YR1.7/1）

腐植質でかなり粘性・湿性あり。堅さ・しまりもみられる。粒子状に割れる。小さいクラックの発達が認められる。全体的にローム・軽石粒の集合体である。

第Ⅲb層 にふい黄褐色土（10YR4/3）

丘陵地内の浸食再堆積である。全体的にローム質で、小さく格子状に割れやすい。

第Ⅳ層 暗褐色土（10YR3/4）

漸移層である。堅くしまっている。粘性・湿性あり。軽石粒・ローム粒の混入が多い。上半部は粒子状の混入が目立ち、全体的に色調が暗く黒褐色を呈し、下半部はブロック状の混入が目立ち、明るい色調である。

第Ⅴ層 明黄褐色軽石層（10YR6/8）

千曳浮石に相当する。緻密堅固である。上半部は黄褐色を呈し、軽石粒（直径10mm以下）を含む細粒軽石質火山灰であるが、斜面付近は丘陵地内の浸食再堆積により、ややローム質である。下半部は灰黄色を呈し、軽石（直径10mm以下）が多少混入するラビリ質軽石層である。

第Ⅵ層 灰黄褐色（10YR6/2）

粘土質で、緻密堅固である。暗色帯を呈する。

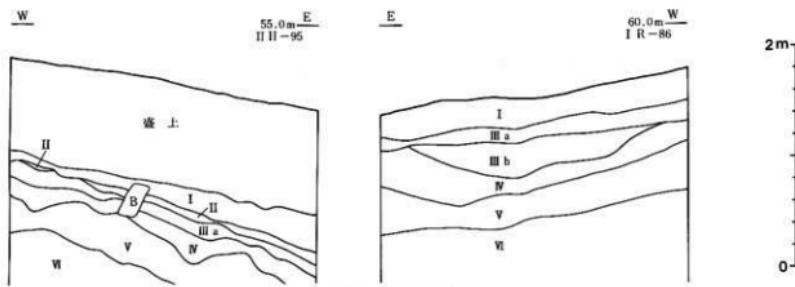


図3 基本層序

## 第2章 検出遺構と出土遺物

### 第1節 壇穴住居跡

縄文時代の壇穴住居跡1軒と平安時代の壇穴住居跡1軒を検出し、前者を第1号住居跡、後者を第2号住居跡として調査した。

#### 第1号住居跡（図4～5）

【位置と確認】 I U・V-73グリッドに位置している。

【平面形・規模】 短軸3m40cm、長軸4m30cmの楕円形を呈している。床面積は10.7m<sup>2</sup>である。

【壁・床面】 検出面からの壁高は、10～20cmである。床面はほぼ平坦で、硬い。

【炉】 中央からやや北側へ寄ったところに、土器埋設炉を検出した。28×35cmの楕円形を呈した深さ23cmのピットに深鉢型土器の下半部（図4-1）を埋設したものである。

【壁溝】 確認できなかった。

【柱穴・ピット】 住居内の中央付近に2個のピットを検出した。ピット1（P1）は30×64cmの長円形で深さ23cm、ピット2（P2）は30×42cmの不整円形で、深さ25cmである。

【堆積土】 6層に区分した。ローム粒を含んだ暗褐色土や褐色土が主体である。

【出土遺物】 覆土から、床面にかけて縄文時代中期の遺物が少量出土した。図4-2は、床面直上から床面にかけて出土した土器である。4個の波状口縁を持つ小型の深鉢型土器である。また、石器は、床面から石台1点（17）、床面直上からU-フレイク1点（14）、覆土からスクレイバー1点（16）、R-フレイク1点（15）、フレイク8点が出土した。

（畠山 犀）

図番号	出土地点	層位	部位	外 面 形 態	寸 寸 寸 寸 寸	分 量	備 考	整理番号
4-1	1号住居	壁脚部	剥離下牛	羽状織文(結束第1種)		H-g		11
4-2	1号住居	床面	口縁～脚部	波状口縁、唇唇、L脚位		H-d		9
5-1	1号住居	覆土	口縁部	唇唇上に織文		H-d		275
5-2	1号住居	床面	脚部	羽状織文(結束第1種)		H-g		261
5-3	1号住居	床面	脚部	羽状織文(結束第1種)		H-g		262
5-4	1号住居	床底	脚部	羽状織文(結束第1種)		H-g		274
5-5	1号住居	床底	脚部	織文(R.L.)		H-g		267
5-6	1号住居	床底	脚部	羽状織文(結束第1種)		H-g	5-13と同一個体？	266
5-7	1号住居	床底	脚部	織文(L.)、結節鉗軸？		H-g		265
5-8	1号住居	床底	脚部	織文(L.)		H-g		264
5-9	1号住居	覆土	口縁部	波状口縁、羽状織文(結束第1種)		H-g		271
5-10	1号住居	覆土	口縁部	唇唇上に織文		H-d		270
5-11	1号住居	覆土	口縁部	織文(R.L.)、唇唇上にも織文地文		H-d	同一個体？	269
5-12	1号住居	覆土	口縁部	織文(R.L.)、唇唇上にも織文地文		H-d		268
5-13	1号住居	覆土	脚部	羽状織文(結束第1種)		H-g	5-6と同一個体？	273

図番号	出 土 地	層位	器 種	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	石 質	備 考	整理番号
5-14	1号住居	床底	Uフレイク	50	38	6	8.2	珪質灰岩	S-6	36
5-15	1号住居	覆土	Rフレイク	26	23	6	3.4	珪質灰岩		46
5-16	1号住居	覆土	スクレイバー	54	17	5	4.0	珪質灰岩		24
5-17	1号住居	床面	石台	360	342	133	14,800	安山岩	S-1	74

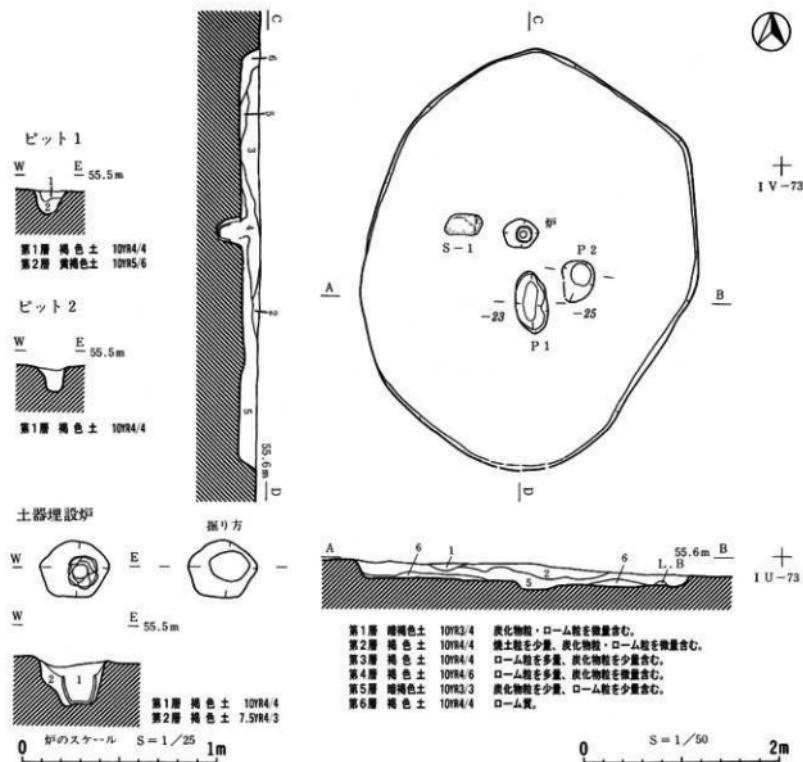


図4 第1号住居跡と出土遺物

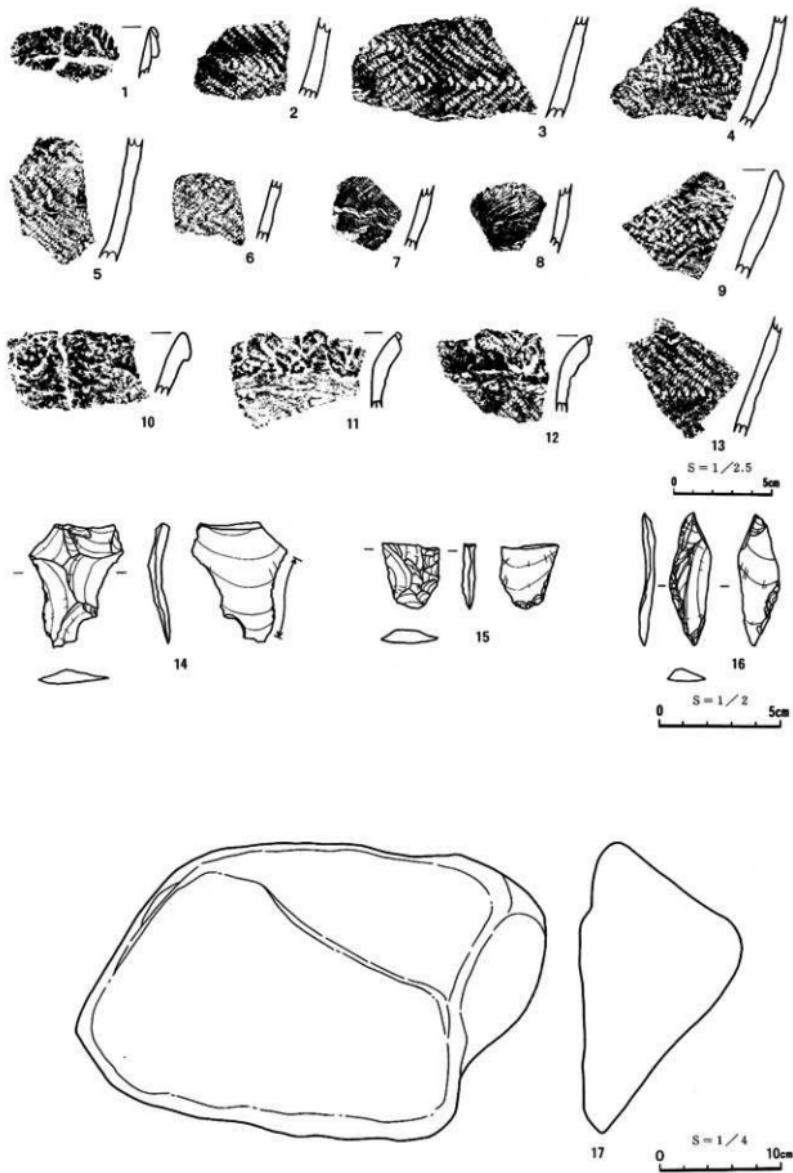


図5 第1号住居跡出土遺物

## 第2号住居跡（図6～9）

【位置と確認】 II F・G-116・117グリッドに位置している。住居の大部分が調査区域外にあるため、全体の四分の1ほどを調査したに過ぎない。

【重複】 調査した部分では、他の遺構との重複は見られなかった。

【平面形・規模】 平面形は方形か長方形を呈するものと思われる。北壁辺は4m87cmである。主軸方位はN-96°-Eである。

【壁・床面】 検出面からの壁高は、30cm前後である。検出した部分の床面は、ほぼ平坦である。

【カマド】 東壁の北寄りのところに、地下式のカマドを検出した。カマド本体は粘土質の黄褐色土を主体として構築されている。火床面は良く焼けており、40×52cmの楕円形の酸化面が形成されている。煙道部は、トンネル状に掘り抜かれており、煙出し坑に向かって、次第に低くなるように造られていく。煙出し孔は、壁から約1m離れた場所にあり、37×50cmの楕円形を呈している。検出面から底面までの深さは60cmである。

【壁溝】 調査した部分では確認できなかった。

【柱穴・ピット】 3個検出した。このうち、ピット1（P1）は67×78cmの台形状を呈した土坑である。深さ26cmであるが、南側がさらに14cm深くなっている。覆土中からは鉄滓や羽口片が出土した。

【堆積土】 9層に区分した。黒色土や黒褐色土が主体であるが、第2層と3層との間に白頭山火山灰と思われる火山灰を確認した。

【出土遺物】 土師器は甕や壺の破片約30点のほかに、完形・略完形の壺が6点出土した。また、小型の土師器が1点出土した。須恵器片は23点出土し、このうち壺が一部復元できた（図8-15）。この他に、土製紡錘車1点、鉄器1点、台石1点のほか、羽口片や鉄滓が多数出土した。鉄滓は、橢形のやや大きなものから、0.5～1cm前後の小さなもの（精錬滓？）まであるが、とくに後者が多い。覆土中から2,848点（4,656g）、床面上から204点（2,618g）、ピット1（P1）から107点（532g）の鉄滓が出土した。

（畠山 異）

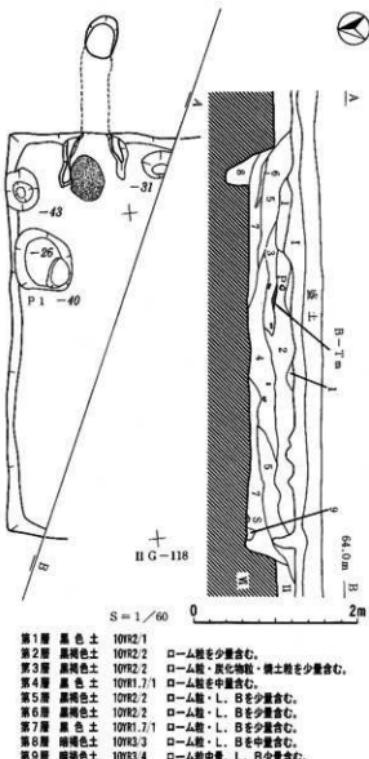


図6 第2号住居跡

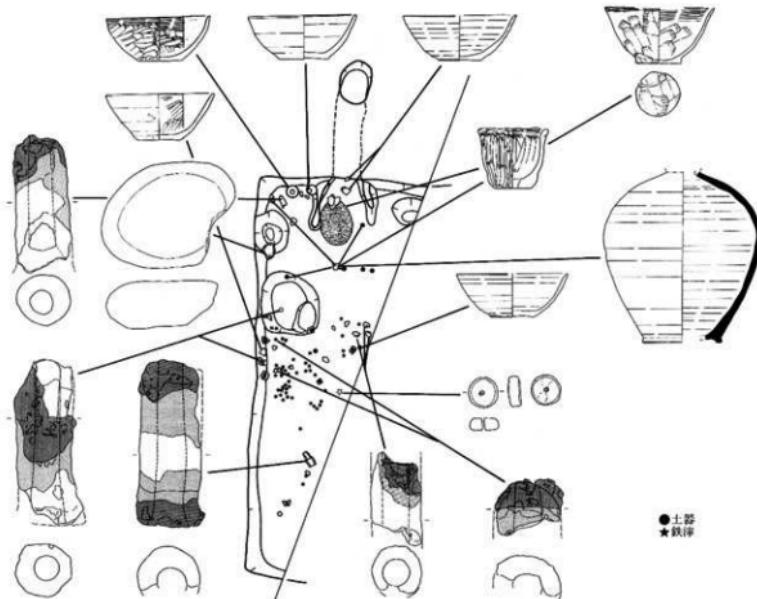
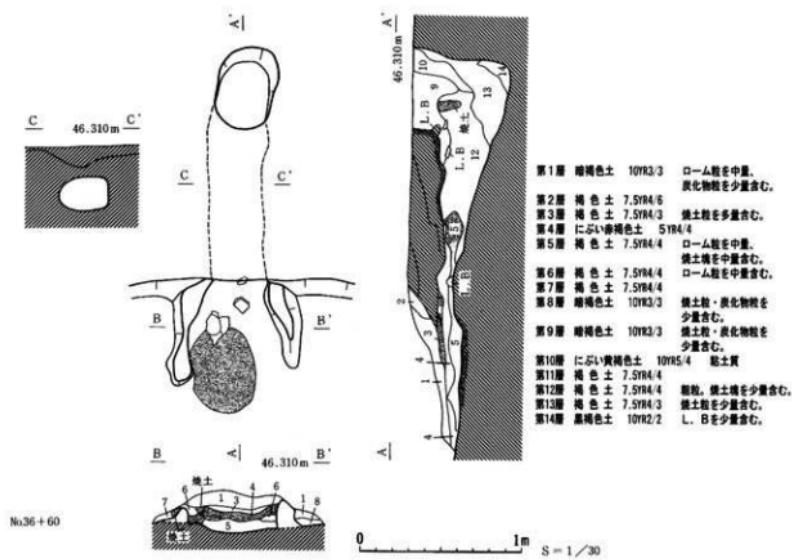
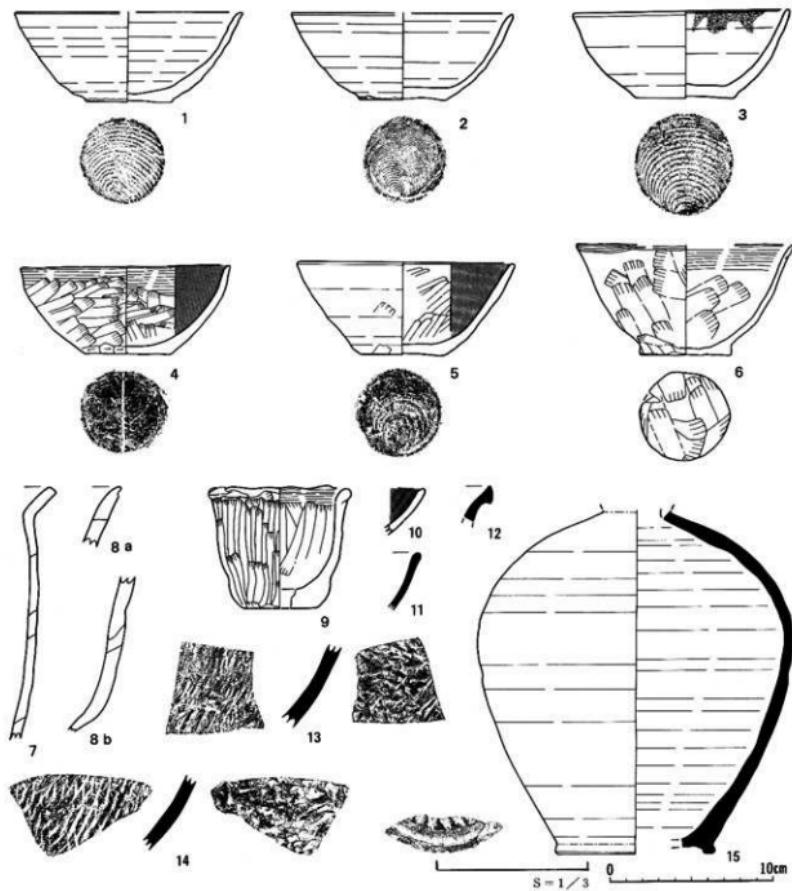
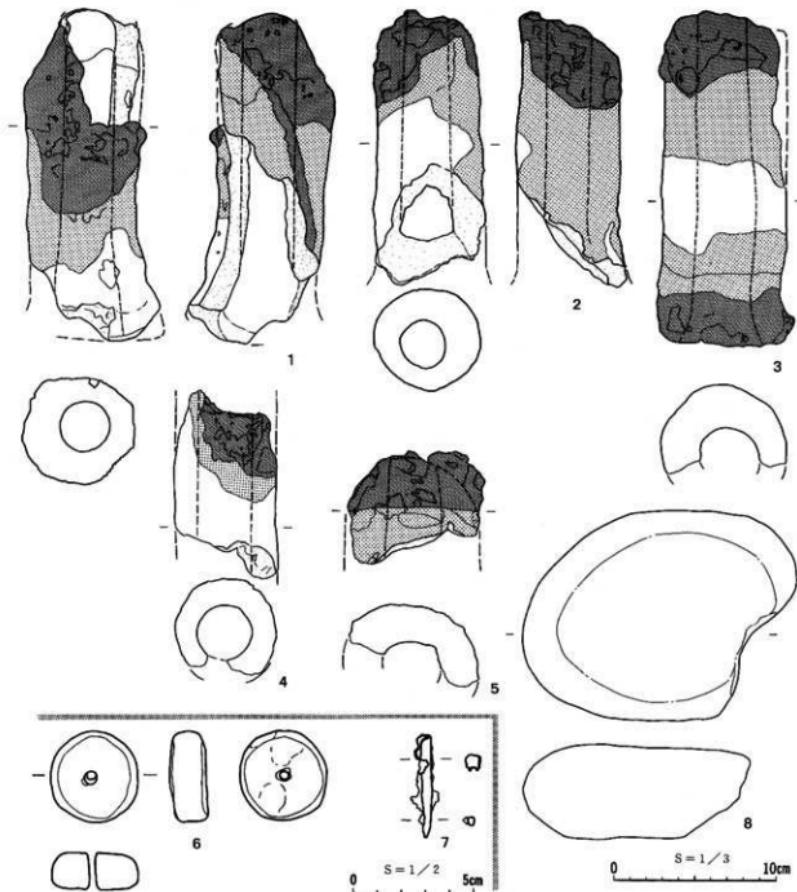


図7 第2号住居跡カマド・遺物の出土状況



番号	種類	器種	出土地・層	口径	底径	器高	外面調整	内面調整	底面調整	備考	整理番号
1	土器部	环	カマド覆土	14.0	5.2	5.6	ロクロ	ロクロ	回転系切	P-14-15	5
2	土器部	环	床直	13.7	5.3	5.4	ロクロ	ロクロ	回転系切	P-2	4
3	土器部	环	床直	13.3	6.0	5.4	ロクロ	ロクロ	回転系切	P-15、複数炭化物付着	3
4	土器部	環	覆土	12.8	5.2	5.5	ヨコナデ、ナデ	黒色処理、ミガキ	黒ナデ	P-3	2
5	土器部	环	カマド覆土	13.3	5.2	5.7	ロクロ	黒色処理、ミガキ	回転系切	P-18	1
6	土器部	环	床直+ビット3 (13.4)	5.5	6.8	ヘラナデ	ヨコナデ、ヘラナデ	ナデ?			6
7	土器部	便	カマド覆土	-	-	-	ナデ、ケズリ	ヨコナデ、ナデ	-		
8	土器部	なべ?	カマド覆土	-	-	-	ケズリ	-	-		
9	土器部	小型土器	カマド覆土	-	-	-	-	ナデ	-		
10	土器部	环	カマド覆土	-	-	-	ロクロ	黒色処理、ミガキ	-		
11	須恵器	环	覆土	-	-	-	ロクロ	ロクロ	-		
12	須恵器	釜	覆土	-	-	-	ロクロ	ロクロ	-		
13	須恵器	便	カマド覆土	-	-	-	タタキ痕	-	-		
14	須恵器	便	複数面	-	-	-	タタキ痕	-	-		
15	須恵器	釜	床直、覆土	-	-	-	ロクロ	着花痕?			

図8 第2号住居跡出土遺物1



番号	出土地	層位	種類	長さ(cm)	外径(cm)	内径(cm)	備考	整理番号
1	2号住居	覆土+ピット1	羽口	20.3	7.3	3.0	ハ12、16	1
2	2号住居	床直	羽口	17.2	6.5	2.8	ハ1	4
3	2号住居	床直	羽口	20.5	7.6	3.7	ハ11	2
4	2号住居	床直	羽口	11.6	6.2	3.3	ハ2、3、4	3
5	2号住居	床直	羽口	6.8	8.1	3.3	ハ9、14	5

番号	出土地	層位	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
6	2号住居	覆土	土製纺錘車	3.7	3.5	1.3	22.9	纺輪部分

番号	出土地	層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	備考	整理番号
8	2号住居	床面	合石	176	134	63	1,909	石英安山岩	器面平滑	77

図9 第2号住居跡出土遺物2

## 第2節 土坑・溝状土坑・土器埋設遺構・焼土遺構

### 第1号土坑（図10）

【位置】 I X-97グリッドに位置する。【平面形・規模】 平面形は径100cmの不整な円形を呈し、深さ17cmである。【壁・底面】 壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦で硬い。【堆積土】 4層に分層できた。ローム粒を含んだ黒褐色土が主体である。【出土遺物】 なし。【時期】 不明である。（畠山 畿）

### 第2号土坑（図10）

【位置】 I P・Q-83グリッドに位置する。南側が調査区域外にあるため、全体の約半分しか調査出来なかった。【平面形・規模】 平面形は径156cmの円形を呈すると思われ、深さ100cmである。【壁・底面】 壁は垂直に近く立ち上がり、底面はほぼ平坦である。【堆積土】 9層に分層できた。上部の中央付近、第1層と第2層との間に焼土の堆積が見られた。【出土遺物】 繩文が施された薄手の土器の細片が数点出土した。また、四基無基の石鏡が1点出土した。【時期】 時期決定の根拠に欠けるため、不明である。（畠山 畿）

### 第1号溝状土坑（図10）

【位置・確認】 I Q-58・59の斜面上に位置する。基本層序第V層において、黒褐色土の細長いプランとして確認した。【平面形・規模】 開口部で最大長3m、最大幅60cm、深さ1m40cmの溝状を呈する。底面は最大長3m65cm、最大幅25cmである。長軸方向は東-西で、地形の傾斜方向にはほぼ平行して構築されている。【壁・底面】 基本層序第V層を掘り込んで壁とし、第V層中に底面が形成されている。断面形は短軸は開口部が若干開く形で、長軸は袋状を呈している。【堆積土】 上位は黒褐色土を、下位は褐色土・暗褐色土を基調とする覆土構成である。【出土遺物】 なし。【時期】 時期決定の根拠に欠け、不明である。（工藤 由美子）

### 第1号土器埋設遺構（図10）

【位置・確認】 I Q-72に位置する。基本層序第IV層において埋設土器部を確認した。【掘り方】 掘り方の平面形は円形を呈し、基本層序第IV層を掘り込んでいる。規模は長径22cm、深さ10cmである。【埋設状況】 土器は掘り方のほぼ中央部に正立状態で埋設されていた。口縁部が欠損している。【堆積土】 土器の内部・掘り方内ともに暗褐色土が堆積している。【時期】 埋設された土器から、繩文時代後期前葉に構築された遺構と思われる。（工藤 由美子）

### 第1号焼土遺構（図10）

【位置・確認】 I P・Q-26に位置する。基本層序第IV層において確認した。【規模と形状】 70cm×45cmの不整形に現地性の焼土が形成されていた。【出土遺物】 なし。【時期】 時期決定の根拠に欠け、不明である。（工藤 由美子）

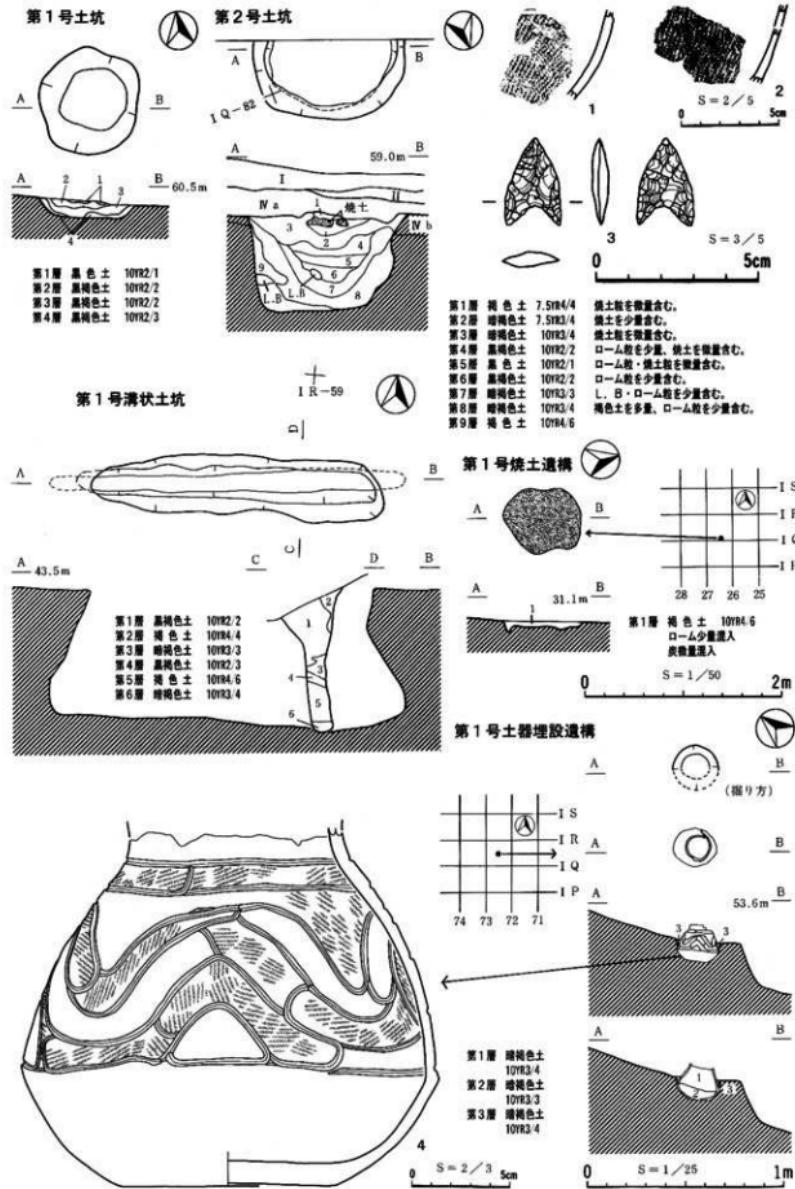


図10 土坑・溝状土坑・土器埋設遺構・焼土遺構

## 第3章 遺構外の出土遺物

### 第1節 土器

今回の調査では、段ボール箱で13箱分の土器が出土した。本遺跡では、縄文時代前期から平安時代までの土器が出土している。ほとんどが破片資料であり、器形のわかるものはあまりない。最も多く出土したのは縄文時代中期の円筒上層式の土器で、次に多いのは弥生時代後期のものである。平安時代の土器は遺構内からがほとんどを占めており、ここでは取り扱わない。

#### 第I群 縄文時代前期の土器（図11-1～11）

##### a類 円筒下層b式期に相当する土器（図11-1）

1点のみの出土で、口頸部破片である。平口縁で、頸部には結節回転文が施文され、頸と胴部の境に太い隆帯が貼り付けられている。

##### b類 円筒下層d式期に相当する土器（図11-2～11）

破片のみの出土である。口縁には、波状と平口縁がある。波状口縁には、すべて口頸部に隆帯が継位に貼り付けられている。波頂部に突起を付け、その突起下の頸部に楕円形（横長）の孔があり、口頸部にLとRの単軸絡条体第1類を施文しているもの（2）や、継位隆帯の上・下部にボタン状粘土を貼り付けたもの（4）等がある。平口縁のものには、口唇部に縄文を施し、口頸部にLとLの単軸絡条体第1類を施文しているもの（5）や、細かい撚糸圧痕を施しているもの（6）等がある。頭と胴部の境には、刺突や胴部と撚りが違う縄文等を施文している。胴部文様には、木目状撚糸文・羽状縄文・多軸絡条体等がみられる。

#### 第II群 縄文時代中期の土器（図11-12～図16-2）

##### a類 円筒上層a式期に相当する土器（図11-12～15）

器形のわかるものはない。波状口縁（弁状突起）のものがみられ、口唇部内面が楕円形に窪んでいるものがある（12）。口縁部に隆帯を貼り付け、口頸部に鋸歯状文を施文して、X字状の隆帯を胴部との区画隆帯まで橋状に貼り付けているもの（13～15）がある。

##### b類 円筒上層b式期に相当する土器（図12-1～4）

器形がわかるものはないが、比較的大きな破片も出土している。口縁には二又状のものがみられ、二又の突起の谷部の外面にボタン状粘土を貼り付けたものもある（1）。口縁から口頸部には隆帯を貼り付け、その隆帯間に爪形圧痕文と縄文を施文している。

##### c類 円筒上層c式期に相当する土器（図12-5・6 図13 図14-2～6）

本遺跡で最も多く出土した土器型式である。完形のものはないが、器形のわかるものが出土している。破片でも大きいものが多い。口縁は波状で、弁状・二又状・山形状がみられるが、ほとんどが弁状である。口縁から頸部には、全面に円筒上層b式よりもやや細めの隆帯が貼り付けられ、その隆帯間に刺突が施してある。頸部と胴部の区画帯には2本の平行隆帯を貼り付けているが、その下に波状の隆帯を貼り付けているもの（図13-1）もみられる。胴部文様には羽状縄文・斜行縄文等がみられる。

**d 類 円筒上層 d 式期に相当する土器 (図14- 1・7~11 図15- 2~5)**

口縁には波状口縁と平口縁があり、波状には弁状・二叉状・山形状等がみられる。弁状突起の下部に梢円形の孔があいているものもある (図14- 1)。口頭部には、全面に繩文を施文してから隆帯を貼り付けたものと無文に隆帯を貼り付けたものの二種類がある。また、平口縁で口縁部のみに波状の隆帯を貼り付けているものがある (図15- 3~5)。

**e 類 円筒上層 e 式期に相当する土器 (図15- 6~10)**

口縁には波状と平口縁のものがある。波状口縁のものは山形状の突起で、口唇部に細い隆帯を貼り付け、口頭部は繩文施文後に沈線文を施しているもの (10) や、口頭部から胴部に羽状繩文を施文しているもの (9) がみられる。平口縁のものには、口唇部に刻み目状に繩文を施文しているもの (6) と、工具による刻み目を施しているもの (7・8) がある。

**f 類 中期後葉の土器 (図15- 11~18)**

すべて胴部破片で器形のわかるものはない。楕円式と最花式に並行すると思われる土器が出土している。楕円式に並行すると思われる土器には、繩文施文後に 3 本を単位とした渦巻状・平行・弧状等の沈線文を施しているものがある (13~16)。最花式と思われる土器は、地文繩文に縦位の沈線文を施している (17・18)。

**g 類 中期と思われるが型式など不明な土器 (図15- 1 図16- 1・2)**

口縁・胴部破片が多く、全体形はわからないものが多い。円筒上層式のもの (図15- 1) と、円筒上層式以後のもの (図16- 1・2) がみられる。

**第三群 繩文時代後期の土器 (図16- 3~図17- 10)****a 類 後期初頭から前葉の土器 (図16- 3~12)**

ほとんどが破片であり、器形のわかるものはない。弥栄平式に並行すると思われる土器片が 2 点 (3・4) 出土しているが、同一個体と思われる。波状山形口縁で、口縁に沿った平行沈線施文後、沈線間に繩文を施している。その他、繩文施文後に沈線を施しているもの (5)、地文無文に横位の粘土紐を貼り付け、それに沿って沈線を施文しているもの (6)、沈線のみの文様 (7)、隆帯を貼り付けて隆帯上に竹管による刺穴を施し、その隆帯に沿った沈線を施文したもの (8)、等がある。また、斜行繩文を地文とし、細くて深い沈線を胴部との区画帯のように入れているもの (10~12) もあるが、破片のため文様は不明である。

**b 類 十腰内 I 式期に相当する土器 (図16- 13~図17- 7)**

第 1 号埋設七器遺構の土器 (図10- 4) がこの時期に相当する。埋設土器と胴部に網目状撚糸文を施したもの (図17- 1) 以外は全て口縁または胴部破片である。胴部に入組文・網目状撚糸文を施文しているものが多い。入組文のものに朱塗りのものがある (図16- 14~16)。口縁部文様がメガネ状のもの (図16- 13) や、磨消のみられるもの (図17- 6・7) もある。

**c 類 後期中葉の土器 (図17- 8)**

1 点のみの出土である。十腰内 II ~ III 式であると思われる。

**d 類 後期と思われるが型式など不明な土器 (図17- 9・10)**

口縁部のみを掲載した。どちらも繩文 (LR) のみを施文している。

#### 第IV群 繩文時代晚期の土器（図17-11～19）

すべて破片資料である。15は注口土器の底部と考えられ、大洞B C～C 1式期に相当するもので、13と同一個体ではないかと思われる。11・12・14は大洞C 1～C 2式に相当するものと思われる。口縁は平口縁で、口唇部に刻み目を施したもの（12）、頸部と胴部の境目に瘤状突起があるもの（14）、等がみられる。胴部には、繩文または縦位の細い沈線を施文している。また、晚期のいつ頃かは不明であるが、頸部を沈線で区切り、肩に繩文を施文したもの（16・17）や、胴部に繩文を施し、底部が平らなミニチュアの土器（18）もみられる。

#### 第V群 弥生時代の土器（図18-19）

調査区南側中央（グリッド I N～U-70～87）と調査区北側東端（グリッド I R～T-27～29・I O-26）から出土している。特に調査区南側中央から集中して出土している。破片のみの資料で、弥生時代前期・後期のものと思われる土器が出土している。後期のものが多く、念仏間式期～大石平I群期に相当する土器と思われる。

##### a 類 弥生時代前期の土器（図18-1～3）

3点のみの出土である。3点とも平行沈線が施文されているが、2には沈線間に瘤がみられる。

##### b 類 弥生時代後期の土器（図18-4～図19）

念仏間式期から大石平I群期あたりまでの土器が出土している。破片のみであるため、文様特徴別に記述する。

###### 1 口唇部に工具文・繩文を施文しているもの（図18-4～9）

工具文では、口唇部に刻み目を入れたもの（5）と口唇部外面に縦位の圧痕を加えたもの（8）がある。繩文施文は数点出土している。7は、口唇部に外面とは燃りの異なる原体を施文している。裏面の頸部の所にも繩文を施文しているが、これは外面と同じ原体の繩文である。

###### 2 繩文と沈線文を施文しているもの（図18-10～18）

繩文施文後に沈線を施しているもの（10～14）、沈線施文後に繩文を充填しているもの（15～18）がみられる。11～14は同一個体と思われるが、口縁部がかなり内湾している。内湾した口縁部外面にR L・L Rの繩文を施文し、そこに粘土を貼り付け、粘土の真ん中に棒状工具を縦位に押しつけている。

###### 3 帯繩文を施文しているもの（図19-1～14）

帯繩文を施文してから沈線を加えたものと、帯繩文のみを施文しているものがある。沈線文には、何条かの平行沈線に鋸歯状文がくずれた波状文を施文しているものが多い。沈線は概して雑である。11は沈線間に繩文がわずかに施文されており、帯繩文かどうかは不明である。

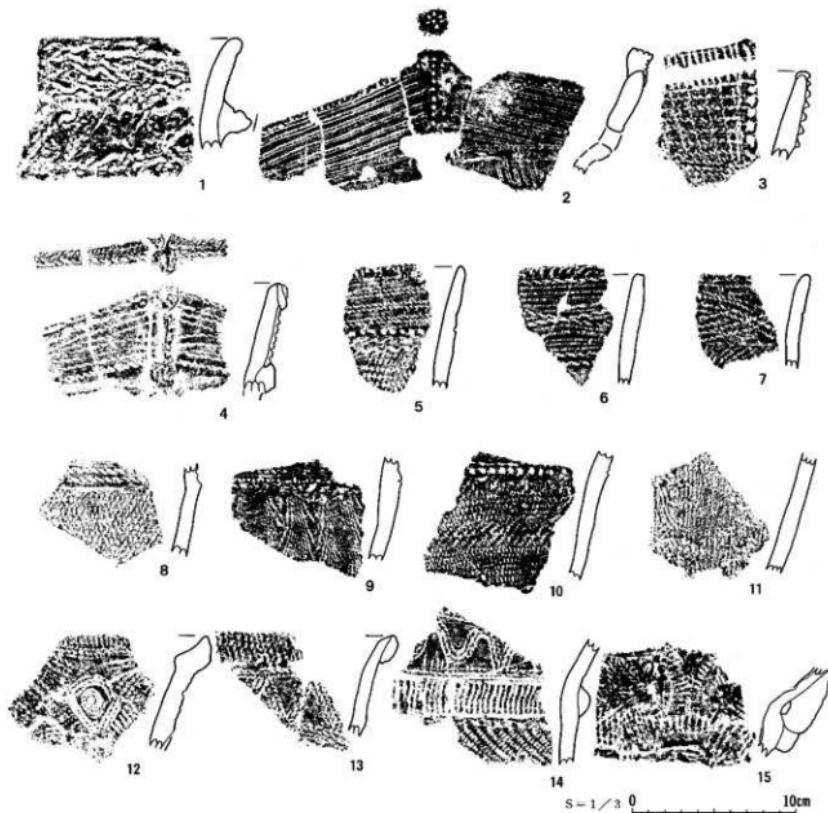
###### 4 沈線文のみ施文しているもの（図19-15・16）

2点のみ掲載した。15は沈線的にはb類3のものと同類で、帯繩文が入っていないことよりb類3よりも新しいものと思われる。

###### 5 底部（図19-17・18）

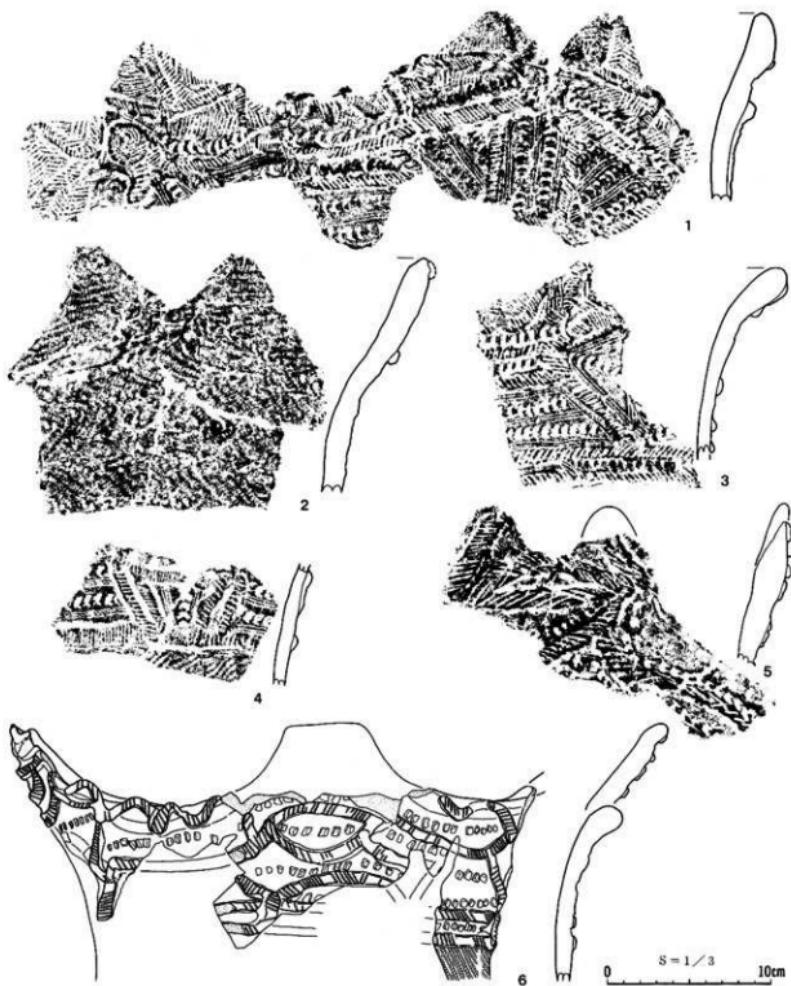
2点のみ出土した。18は胴部に繩文R Lを斜位に、底部付近には横位に回転させている。

（工藤 由美子）



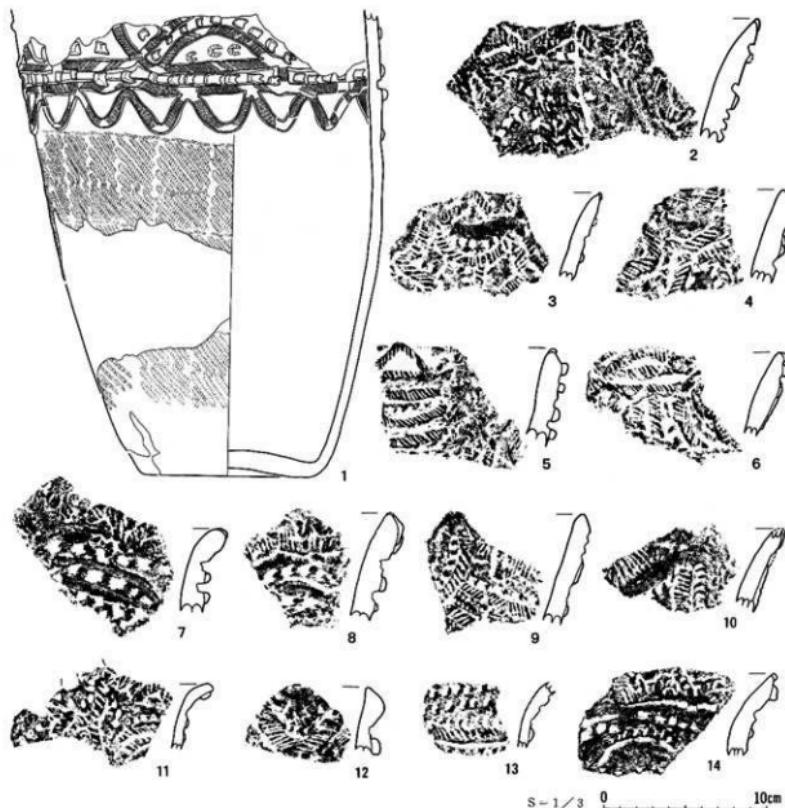
番号	出土地点	層位	形 種	外 面 特 徴	分 類	備 考	整理番号
1	I R - 53	I	口縫~側	斜面凹弧文、隆脊(横文押住)	I-a		21
2	I R - 81	I	口縫~側	隆脊、端円形の孔 L+R+L+Lの半輪筋条体第1層 刺突	I-b	波状口縫(頂部に突起)	18
3	I R - 81	Ⅲ	口縫	口縫部=横文(L,R,斜位)押住 隆脊(刺突) 滑文(L,R)押住	I-b	波状口縫	41
4	I S - 80	Ⅲ a	口縫~側	隆脊(刺突) ボクア状筋土粘付部(上に葉文R, 滑文L)押住(刺突) 滑文(L,R)押住	I-b	波状口縫	56
5	I P - 75	II	口縫~側	口縫部=横文R+Lの半輪筋条体第1層 刺突 駒頭凹弧文 多輪筋条体	I-b		20
6	I P - 83	Ⅲ a	口縫~側	口縫部=横文(R,L,斜位)押住 滑文(L,R)押住 動注(横文)	I-b		15
7	I S - 80	I	口縫~側	滑文(L)押住	I-b		19
8	I R - 84	I	側~側	横文(L,R)押住 多輪筋条体	I-b		5
9	I Q - 84	I	側~側	横文(L)押住 刺突 木目状幾何文(半輪筋条体第1A層)	I-b		6
10	I R - 81	III	側~側	横文(L,R)押住 刺突 羽状溝文(粘突部第1層) 多輪筋条体	I-b		3
11	I R - 85	I	側	木目状幾何文(半輪筋条体第1A層)	I-b		24
12	I R - 86	I	口縫	口縫部=横文(L)押住 隆脊(横文R,斜位・X字状?) 滑文(L+B+B+L+B)押住 刺突	II-a	波状口縫先起墨	58
13	I R - 86	I	口縫	口縫部=横文(L)押住 刺突	II-a	折り返し口縫 14, 15と同一個体	64
14	I R - 86	I	側~側	縱齒橫文、隆脊(横文L, 橫位)	II-a	13, 15と同一個体	38
15	I R - 86	I	側	X字状隆脊(横状、横文R押住) 隆脊凹弧文	II-a	13, 14と同一個体	61

図11 遺構外出土土器1



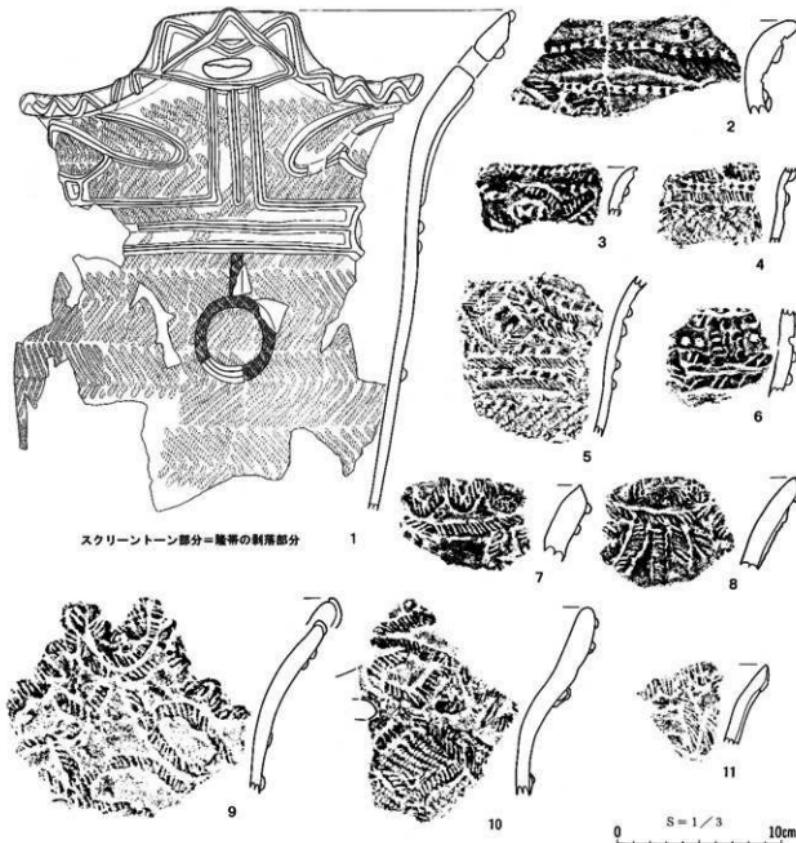
番号	出土地点	層位	部 位	外 面 特 徴	分類	備 考	監理番号
1	II G-96他	Ⅲ	口縁～瓶	ボタン状粘土貼付(縄文(L)褐色状) 唇唇(縄文L押圧) 縄文(L)・系影文押圧	II-b	波狀口縁(二又状山形突起)	??
2	I Y-77他	IV	口縁～瓶	口縁に青い部分のみ唇唇(無文) 羽状縄文(結束系1種)	II-b	波狀口縁(二又状山形突起)	79
3	II G-95他	Ⅲ	口縁～瓶	唇唇(縄文L押圧) 系影文(縄文L)押圧 縄文(L)押圧	II-b	波狀口縁	76
4	IT-77他	IV	瓶～瓶	唇唇(縄文L押圧) 縄文(縄文L)押圧 縄文	II-b		28
5	I O-70他	Ⅲ	口縁	唇唇(縄文L押圧) 唇突	II-c	波狀口縁(二又状山形突起)	66
6	I Q-77	I	口縁～瓶	唇唇(縄文L押圧) 唇突 縄文(R.L. 備位)	II-c	波狀口縁(弁袋)	262

図12 遺構外出土土器 2



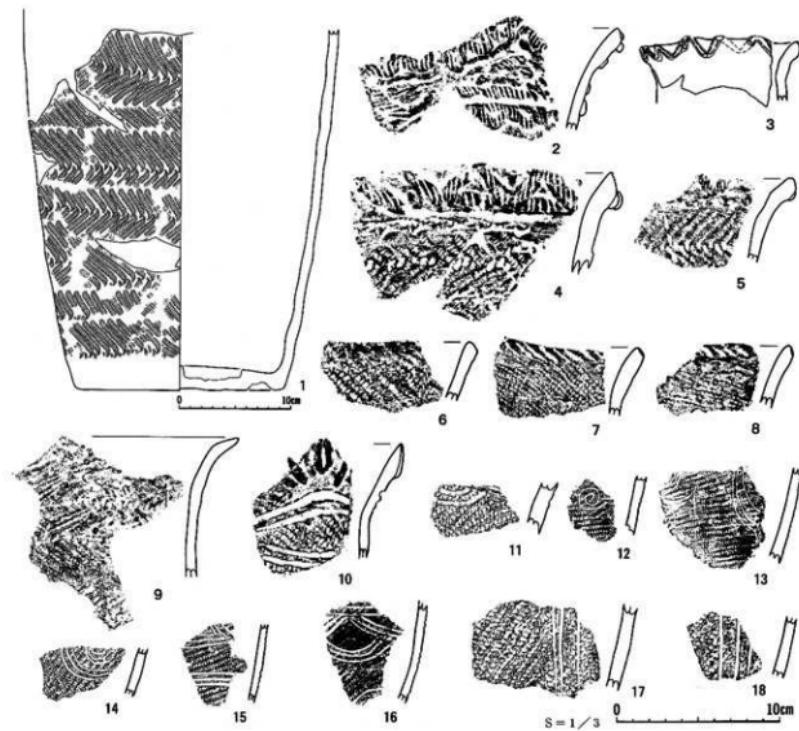
番号	出土地点	層位	層位	外 面 特 徴	分 類	備 考	整理番号
1	I U-77	Ⅲ	新~底	隆唇(縞文し押圧) 刺突 斜へ倒壊下に斜状隆脊 沿状縞文(斜束系1種)	II-c		263
2	「R-75地」	Ⅲ	口縁	隆唇(縞文し押圧) 刺突	II-c	波状口縁(弁状突起)	71
3	I O-76	Ⅲ	口縁	隆唇(縞文し押圧) 刺突	II-c	波状口縁(弁状突起)	48
4	I S-72	I	口縫	隆唇(縞文し押圧) 刺突	II-c	波状口縁(弁状突起)	55
5	I Q-75	Ⅲ	口縫	隆唇(縞文し押圧) 刺突	II-c	波状口縁(弁状突起?)	32
6	I T-72	I	口縫	隆唇(縞文し押圧) 工具爪形狂疵文	II-c	波状口縁(弁状突起)	59
7	I P-75	Ⅲ	口縫	隆唇(口唇部のみ縞文し押圧) 刺突	II-c	波状口縁(二叉突?)	33
8	I R-77	I	口縫	隆唇(口唇部のみ縞文し押圧) 刺突	II-c	波状口縁(弁指形狂疵不明)	49
9	I V-77	Ⅲ	口縫	隆唇(縞文し押圧) 口唇部付近には刺突 その下部は縞文(L)	II-c	波状口縁片方欠損だが二叉突起?	45
10	I S-77	I	口縫	口唇部=肥厚・縞文押圧(壁部) 隆唇(縞文押圧) 刺突	II-c	波状口縁	47
11	I V-77	Ⅲ	口縫	口唇部=肥厚(?)押圧 隆唇(縞文押圧) 工具爪形狂疵	II-c	波状口縁	106
12	I O-77	I	口縫	口唇部=肥厚(?)押圧 隆唇(縞文押圧) 刺突	II-c	波状口縁	31
13	I O-76	Ⅲ	頭	隆唇(縞文し押圧) 工具爪形狂疵文	II-c		53
14	I R-77	I	口縫	隆唇(縞文し押圧) 刺突	II-c	波状口縁?	46

図13 遺構外出土土器3



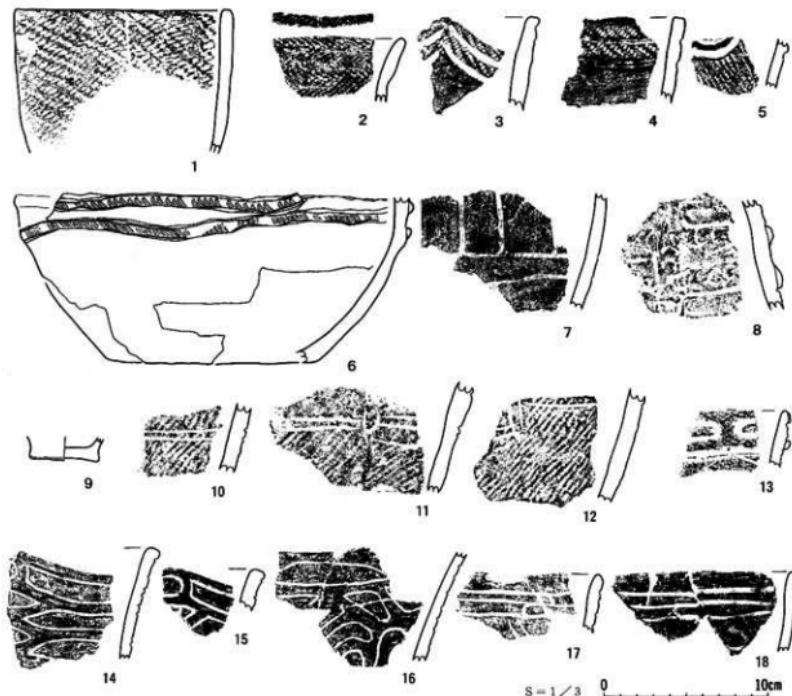
番号	出土地点	層位	部 位	外 面 特 徴		分 類	備 考	整理番号
				形	文			
1	I R-77	Ⅲ	口縁~柄	桔円形孔、羽状溝文(結び目1種)に唇部(無文) 唇部区唇部下に隆起(無文)		II-d	波狀口縁(舟状突起)	264
2	I R-77他	Ⅲ	口縁	唇部(圓文)・押付(無文)	刻痕	II-c		73
3	I Q-77	I	口縁	隆起(圓文)・押付(無文)	工具形割痕文	II-c		60
4	I V-77	Ⅲ	底~腹	唇部(圓文)・押付(無文)	圓文(R.L.・無文)	II-c		109
5	I V-77	Ⅳ	底~腹	唇部(圓文)・押付(無文)	刻痕(圓文)・R.L.・圓文	II-c		113
6	I R-77	I	底	唇部(圓文)・押付(無文)	刻痕	II-c		30
7	I R-74	II	口縁	無文	唇部(圓文)・押付(無文)	II-d	波狀口縁(舟状突起)	29
8	I U-60		口縁	無文	唇部(圓文)・押付(無文)	II-d	波狀口縁(舟状突起)	36
9	I V-77	I	口縁~	無文	唇部(圓文)・押付(無文)	II-d	波狀口縁(二又丘山形突起)	74
10	I S-81	Ⅳ	口縁~無	橢丸(×L.)・無(無文)	隆起(圓文)・押付(無文)	II-d	波狀口縁(二又状か?)	72
11	I T-73	I	口縁	唇部(圓文)・押付(無文)		II-d	波狀口縁	51

図14 遺構外出土土器4



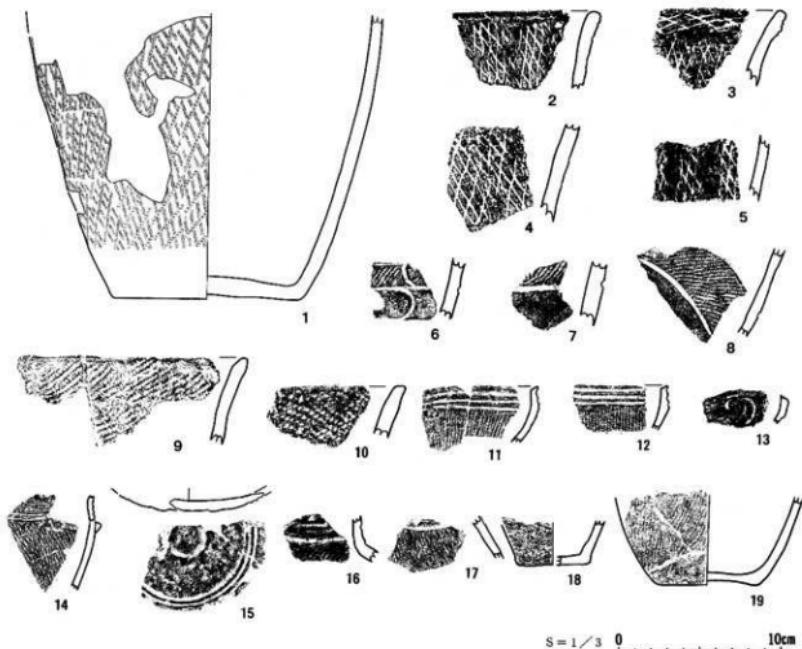
番号	出土地点	層位	部・位	外　面　特　徴	分　類	備　考	整理番号
1	I V-77	Ⅲ	側～底	羽状溝文(結束部第1種)	Ⅱ-g		261
2	I O-75	Ⅲ	口縫～側	雁形(翼文L, 扇位)	Ⅱ-d	波状口縫	112
3	I P-74	Ⅲ	口縫～側	口唇部に高い角度(無文)	Ⅱ-d		70
4	I T-72	I	口縫～側	口唇部厚岸 隅部(翼文L, 扇位) 羽状溝文(結束部第1種)	Ⅱ-d		69
5	I O-76	Ⅲ	口縫	口唇部厚岸 隅部(翼文L, 扇位) 羽状溝文(結束部第1種)	Ⅱ-d		34
6	I O-76	Ⅲ	口縫	口唇部(翼文L, 扇位) 扇位(翼文R L, 側位)	Ⅱ-e		103
7	I Q-76	Ⅲ	口縫	口唇部～肩み口 翼文(R L, 側位)	Ⅱ-e		97
8	I P-77	I	口縫	口唇部～肩み口 翼文(R L, 側位)	Ⅱ-e		96
9	I S-78	I	口縫～側	羽状溝文	Ⅱ-e		117
10	I R-74	Ⅲ	口縫～側	唇部(無文) 翼文(R L, 側位)に波状	Ⅱ-e	波状口縫	100
11	I O-75	Ⅲ	肩	翼文(L R, 側位)に波狀	Ⅱ-f		158
12	I O-76	I	肩	翼文(L R, 側位)に渦巻状	Ⅱ-f		245
13	I O-75	Ⅲ	肩	翼文(L R, 側位)に波狀	Ⅱ-f		155
14	I O-75	Ⅲ	肩	翼文(L R, 側位)に渦巻状？波狀	Ⅱ-f	15, 16と同じ體	241
15	I O-76	I	肩	翼文(R L, 側位)に波狀	Ⅱ-f	14, 16と同じ體	226
16	I O-76	Ⅲ	肩	翼文(L R, 側位)に波狀沈落	Ⅱ-f	14, 15と同じ體	220
17	I P-76	I	肩	翼文(R L, 側位)に波狀	Ⅱ-f		179
18	I Q-79	I	肩	翼文(R L, 側位)に波狀	Ⅱ-f		169

図15 遺構外出土土器5



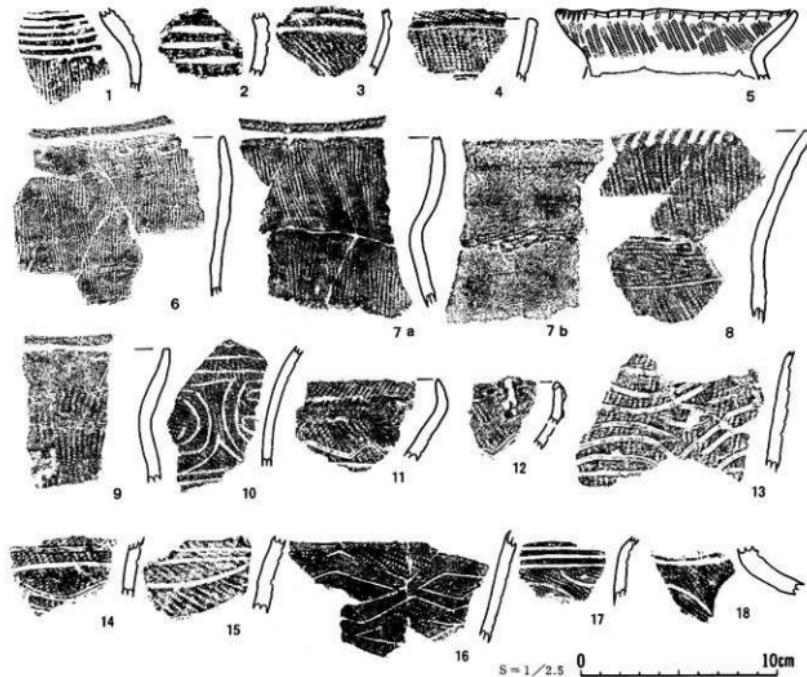
番号	出土地点	断片	部 位	外 面 特 徴	分類	備 考	部番号
1	I S-67	II	口縁~肩	萬文(L.R.、裏位)	II-g		42
2	I Q-75	III	口縁	口唇部=萬文(L.R.、裏位) 羽状繩文(粘土基1種)	II-g		104
3	I Q-80	I	口縁	沈縫 萬文(R.L.)	III-a	波状口縁 4と同一個体	151
4	I Q-73	III	口縁	沈縫 萬文(R.L.)	III-a	3と同一個体	168
5	I S-59	II	肩	萬文(L.R.、裏位) 沈縫	III-a		159
6	I R-27	II	肩?	地文無 粘土基粘付(萬文玄L) 沈縫	III-a		168
7	I T-28	III	肩	沈縫	III-a		174
8	I O-27	I	肩	隆唇(竹管刺痕) 沈縫	III-a		138
9	I P-76	I	底	無文	II-f~III-a	ミニチュア	111
10	I O-75	III	肩	純文(L.R.、裏位)に沈縫	III-a	11, 12と同一個体	162
11	I O-75	II	肩	萬文(L.R.、裏位)に沈縫	III-a	10, 12と同一個体	163
12	I O-75	II	肩	純文(L.R.、裏位)に沈縫	III-a	10, 11と同一個体	153
13	I G-95	II	口縁	メガネ状文 沈縫 唐模萬文	III-b		149
14	I P-74	III	口縁	メガネ状文 入組文	III-b	波状口縁 朱塗り 15, 16と同一個体	171
15	表振		口縁	入組文	III-b	朱塗り 14, 16と同一個体	175
16	I P-74	II	肩	入組文	III-b	朱塗り 14, 15と同一個体	173
17	I O-70	II	口縁	沈縫	III-b		150
18	I O-70	II	口縁	沈縫	III-b		160

図16 造構外出土土器6



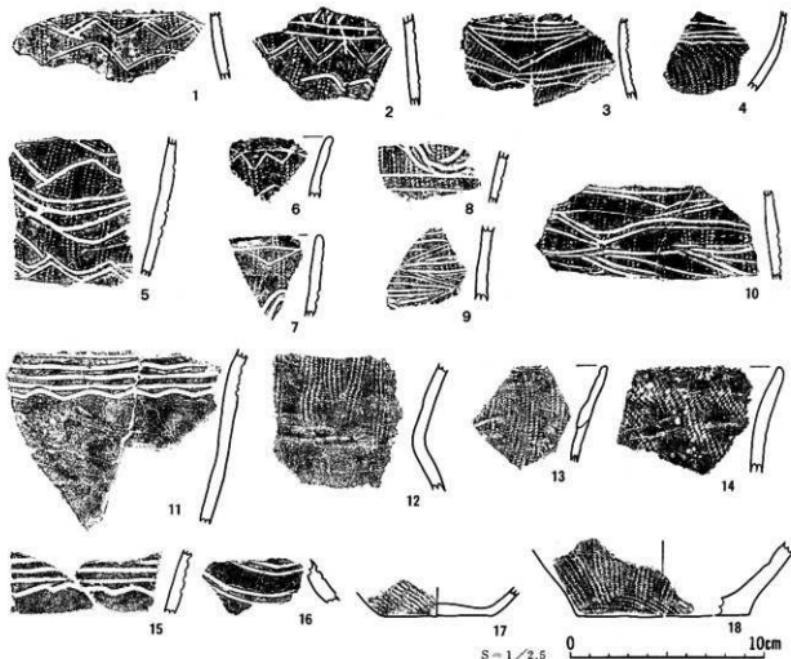
番号	出土地点	層位	部 位	外 面 特 徴	分 類	備 考	整理番号
1	I R-73	II	肩~底	網目状捺文(半輪絞糸体第5型)	III-b		265
2	I T-76	I	口縁	網目状捺文(半輪絞糸体第5型)	III-b		178
3	I S-27	I	口縁	網目状捺文(半輪絞糸体第5型)	III-b		172
4	I T-28	III	肩	網目状捺文(半輪絞糸体第5型)	III-b		182
5	I S-77	I	肩	網目状捺文(半輪絞糸体第5型)	III-b		179
6	I R-28	I	肩	北緯 繩文(L.R.、横位) 摩擦	III-b		167
7	I Q-27	I	肩	北緯 繩文(L.R.、横位) 摩擦	III-b		160
8	I R-85	I	肩	磨擦痕文(L.R.横位)	III-c		152
9	I R-78	I	口縁~肩	繩文(L.R.、横位)	III-d		40
10	I Q-75	I	口縁	繩文(L.R.、横位)	III-d		96
11	I S-74	I	口縁~肩	平行沈痕 緊い造痕文(縦位)	Ⅳ		209
12	I U-71	I	口縁	口唇剥離のみ 平行沈痕 繩文(R.L.、横位)	Ⅳ		206
13	I O-76	III	肩	雲形文	Ⅳ	15と同一個体	201
14	I R-81	I	肩~肩	北緯 繩文欠陥 繩文(R.L.、横位)	Ⅳ		208
15	I R-81	I	肩~底	雲形文? 平行沈痕 底部中央に円形の盛み	Ⅳ	13と同一個体	194
16	I T-71	I	肩~肩	北緯 繩文(L.R.、横位)	Ⅳ		161
17	I R-81	I	肩	北緯 繩文(R.L.、横位)	Ⅳ		157
18	I Q-75	II	肩~底	繩文(L.R.、横位)	Ⅳ?	ミニチュア	120
19	I R-71	IV	肩~底	繩文(L.R.、横位)	Ⅳ		191

図17 遺構外出土土器7



番号	出土地点	層位	部 位	外 面 特 徴	分 類	備 考	整理番号
1	貴探		肩~頸	沈縫 瓢文(R.L.、斜位)	V-a		199
2	I U-74	II	肩	沈縫 痕	V-a		164
3	I O-26	I	肩	沈縫 瓢文(R.L.、横位)	V-a		154
4	I R-82	I	口縫	口唇部=瓢文(R.L.、横位) 沈縫 此處間に縄文(R.L.、横位)	V-b		229
5	I Q-74	II	口縫~肩	口唇部外反 口唇部=肩ひも 口唇部=縄文(R.L.、横位)	V-b		260
6	I P-76	III	口縫	口唇部=縄文(R.L.) 傷縫文(R.L.)	V-b		258
7	I T-71	I	口縫~肩	口唇部=縄文(R.L.、斜位) 斧縫文(R.L.) 瓢面=縄文(R.L.、斜位)	V-b		256
8	I R-74	Ⅲ	口縫~肩	口唇部外反=工具痕 瓢文(R.L.、口縫・肩部=模様 瓶部=斜位) 斧縫文後擦滑	V-b		259
9	I R-82	I	口縫~肩	口唇部=縄文(R.L.) 瓢文(R.L.、斜位) 痕跡	V-b		267
10	I T-87	I	肩	縄文(R.L.) 北縫	V-b		221
11	I T-29	I	口縫	口唇部外縫=縄文(R.L.、横位) 瓢文(R.L.、横位) 北縫	V-b	口縫部内縫 12, 13, 14と同一個体?	195
12	I T-29	I	口縫	口唇部外縫=縄文(R.L.、横位) 粘土貼付(瓦上中に修復工具痕) 瓢文(R.L.、横位)	V-b	口縫部内縫 11, 13, 14と同一個体?	197
13	I T-29	I	肩	帯縄文(R.L.) 瓢文後北縫	V-b	11, 12, 13と同一個体?	198
14	I T-29	I	肩	縄文(R.L.、横位) 沈縫	V-b		222
15	I R-29	I	肩	縄文(R.L.、横位) 北縫	V-b		156
16	I R-81	II	肩	沈縫 瓢文(R.L.、横位)	V-b		234
17	I R-87	I	口縫	沈縫 瓢文(R.L.、横位) 充満	V-b		247
18	I S-72	I	肩	沈縫 瓢文(R.L.、横位) 充満	V-b		187

図18 遺構外出土土器 8



番号	出土地点	層位	部 位	外 面 特 徴	分類	備 考	整理番号
1	I Q-76	II	肩	脊端文(R.L.) 沈縫	V-b		225
2	I S-75	I	肩	脊端文(R.L.) 沈縫	V-b		216
3	I T-70	I	肩	脊端文(R.L.) 沈縫	V-b		217
4	I R-74	II	肩	肩文(R.L., 側面) 沈縫	V-b		220
5	I R-75	II	肩	脊端文(R.L.) 沈縫	V-b		219
6	I S-75	I	口縫	脊端文(R.L.) 沈縫	V-b		223
7	I R-74	III	口縫	脊端文(R.L.) 沈縫	V-b		228
8	I S-75	I	肩	脊端文(R.L.) 沈縫	V-b		227
9	I S-75	I	肩	脊端文(R.L.) 沈縫	V-b		226
10	I S-75	I	肩	脊端文(R.L.) 沈縫	V-b		218
11	I N-71	壁上	肩	沈縫、沈縫附近端文(R.L.)	V-b		183
12	I R-83	肩	脊端無文		V-b		212
13	I R-74	III	口縫	脊端文(R.L.)	V-b		257
14	I R-27	I	口縫	脊端文(R.L.)	V-b		187
15	I S-72	III	肩	沈縫	V-b		213
16	I Q-75	I	肩	沈縫	V-b		243
17	I T-71	I	肩~底	肩文(R.L., 側面)	V-b		193
18	I T-85	肩~底	肩文(R.L., 側面)	底部付近=肩文(R.L., 側面)	V-b		192

図19 遺構外出土土器9

## 第2節 土製品

土製品は、土偶1点・鐸形土製品2点・円盤状土製品1点・紡錘車1点（図9-6）の計5点が出土した。紡錘車は遺構内からの出土、その他は遺構外からの出土である。紡錘車は平安時代、それ以外は縄文時代の遺物と思われる。ここでは縄文時代の遺物について記述する。

### 土偶（図20-1）

調査区南側の斜面より出土した。肩から胸部にかけての破片で、頭・脚部が欠けている。頭から脚部にかけて中央に貫通孔がある。表には乳房（片方は欠損）と臍が粘土により貼付されており、乳房の間に棒状工具によると思われる刺突が1つある。縄文（L）も施文されている。裏面は、連続刺突文である。

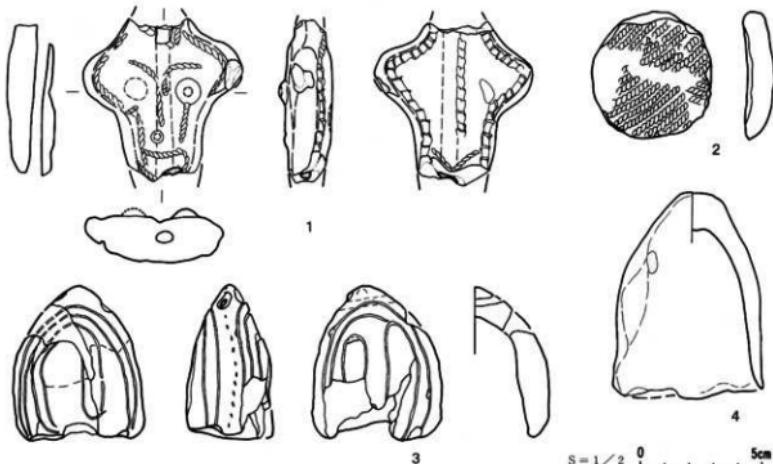
### 鐸形土製品（図20-3・4）

調査区北側・南側からそれぞれ1点ずつ出土した。3は表裏に沈線文、側面に連続刺突文をしたもので、横位の貫通孔がみられる。開口部は楕円形で内湾する。4は無文で、大型のものである。開口部は楕円形である。普通鐸形にみられる鉢部分の貫通孔はない。製作途中のものであるか、または鐸形とは別のものであるかはわからないが、形状より鐸形土製品とした。

### 円盤状土製品（図20-2）

調査区北側の東端から出土した。土器片の胸部を利用したものである。側面は擦られている。文様は縄文（L R・横位）である。

(工藤由美子)



番号	出土地点	層位	器種	部位	計測値 (cm × g)			文 様	整理番号	備 考
					長径×短径	厚さ	重量			
1	I O - 76	田層	土偶	肩～胸	(6.9) × 6.6	2.2	66.8	縄文 (L) 刺突文	1	胸部真ん中に貫通孔
2	I T - 28	田層	円盤状		5.2 × 5.0	0.9	27.7	縄文 (L R・横位)	4	土器片利用 縫面推
3	I T - 28	田層	鐸形	腰～脚	6.1 × 5.4	(3.5)	53.8	沈線 刺突文	3	鉢部分に貫通孔
4	II F - 94	田層	鐸形	略无形	8.5 × 6.2	4.5	91.6	無文	2	

図20 遺構外出土土製品

### 第3節 石 器

今回の調査では、剥片石器や剝片、礫石器などが174点出土した。その内訳は、下記の表のとおりである。以下、簡単に出土石器の概略を記述する。

#### 石鎌（図10-3、図21-1～7）

第2号土坑から1点、遺構外から7点が出土した。凹基無茎鎌2点（図10-3、図21-1）、平基無茎鎌1点（図21-2）、平基有茎鎌1点（3）、凸基有茎鎌4点（4～7）が出土している。石質は、7が黒曜石、ほかは珪質頁岩である。

#### 石錐（図21-8、9）

遺構外から2点出土した。8は小さな剝片の一端に、片方の面から調整加工を施して錐部を作出している。9は不定形の剝片の一端を錐部として利用しているものである。石質は、8が珪質頁岩、9が玉隨質珪質頁岩である。

#### 石匙（図21-10～12）

遺構外から3点出土した。いずれも縦型の石匙である。10は縁辺部に丁寧な調整が施され、裏面には光沢痕が観察される。11・12は全体に粗雑なつくりである。石質は、12が黒曜石、10・11が珪質頁岩である。

#### 石簾（図21-13～15）

遺構外から3点出土した。13は両面調整で、刃は丸刃である。14・15は片面調整に近いもので、刃部は片刃であり、直刃である。石質は、3点とも珪質頁岩である。

#### 模型石器（図22-16～18）

遺構外から3点出土した。2～4cm前後の小さな礫を素材にし、両極技法により作られた石器である。石質は、16・17が珪質頁岩、18が玉隨質珪質頁岩である。

#### スクレイパー（図5-16、図22-19～24）

第1号住居跡から1点（図5-16）、遺構外から12点出土した。このうち図22-19は石鎌に似た小型の石器であるが、尖頭部が作出されていないことから本類に含めた。石質は、すべて珪質頁岩である。

#### R-フレイク（図5-15、図22-25、26）

剝片の一部に簡単な調整が加えられた石器で、連続した定型的な刃部を持たないものである。第1号住居跡から1点（図5-15）、遺構外から12点出土した。図22-26の裏面には、光沢痕が見られる。石質は、すべて珪質頁岩である。

出土石器一覧表

	石鎌	石錐	石匙	石簾	模型石器	スクレイパー	Rフレイク	Uフレイク	剝片	コア	打製石斧	磨製石斧	敲撃器	石錐	台石	砾石	計
遺構内	1	0	0	0	0	1	1	1	8	0	0	0	0	0	2	0	14
遺構外	7	2	3	3	3	12	12	3	88	4	1	3	14	1	2	2	160
計	8	2	3	3	3	13	13	4	96	4	1	3	14	1	4	2	174

**U-フレイク（図5-14、図22-27、28）**

使用痕の見られる剥片で、第1号住居跡から1点（図5-14）、遺構外から3点出土した。石質は、すべて珪質頁岩である。

**打製石斧（図23-29）**

遺構外から1点出土した。両面から、大きな粗い深形調整が施されている。石質は、珪質頁岩である。

**磨製石斧（図23-30、31）**

遺構外から3点出土した。30は刃部の一部を欠くが、ほぼ完形である。石質は緑色細流凝灰岩である。31は刃部の部分で、石質は閃綠岩である。このほかに、小さな刃部片が1点出土している。石質は緑色細流凝灰岩である。

**敲磨器（図23-32～37、図24-38～42）**

凹石、磨石、敲石の類をまとめた。遺構外から14点出土している。このうち、凹孔を有する石器には9点あるが、これには凹孔だけが見られるものと、凹孔以外の痕跡も見られるものがある。前者に相当する石器は5点で、棒状礫を素材としているものと、扁平礫を素材としているものがある。前者は35・36の2点で、35では小さく浅い凹孔が、36では器面の4面に浅く広い凹孔が複数見られる。後者は、32～34の3点である。33・34は破損品であるが、大きめの凹孔が見られる。また、32はやや肉厚の礫素材を利用していて、凹孔は両面に見られる。

凹孔以外の痕跡や機能も見られる石器は4点である。40は棒状礫を素材とし、端部には強いスリの痕跡が、側面には敲打痕が見られる石器である。凹孔は折損部分に見られる。また、37～39は、いわゆる磨石の類に凹孔が見られるもので、長軸側縁にスリ痕か敲打痕が、平坦面には凹孔が見られる石器である。

以上の石器に対して、41・42は敲打痕のみが見られる石器である。41は、太い棒状を呈した石器であるが、側面に広く敲打痕が見られる。42は棒状礫の端部に敲打痕が見られる石器である。

**石鍤（図24-43）**

遺構外から1点出土した。扁平礫の両端を打ち欠いている。石質は、硬質の細流凝灰岩である。

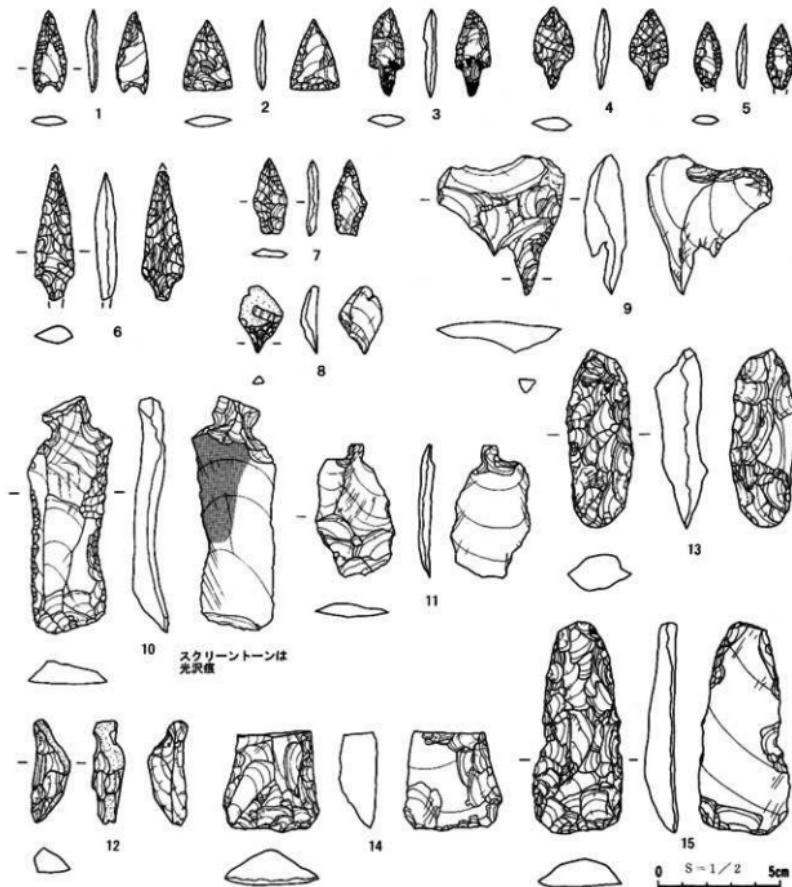
**台石（図5-17、図9-8、図24-46、47）**

第1号住居跡（縄文時代中期）から1点（図5-17）、第2号住居跡（平安時代）から1点（図9-8）、遺構外から2点（図24-46、47）出土した。石質は、図5-17は安山岩、他は石英安山岩である。

**砥石（図24-44、45）**

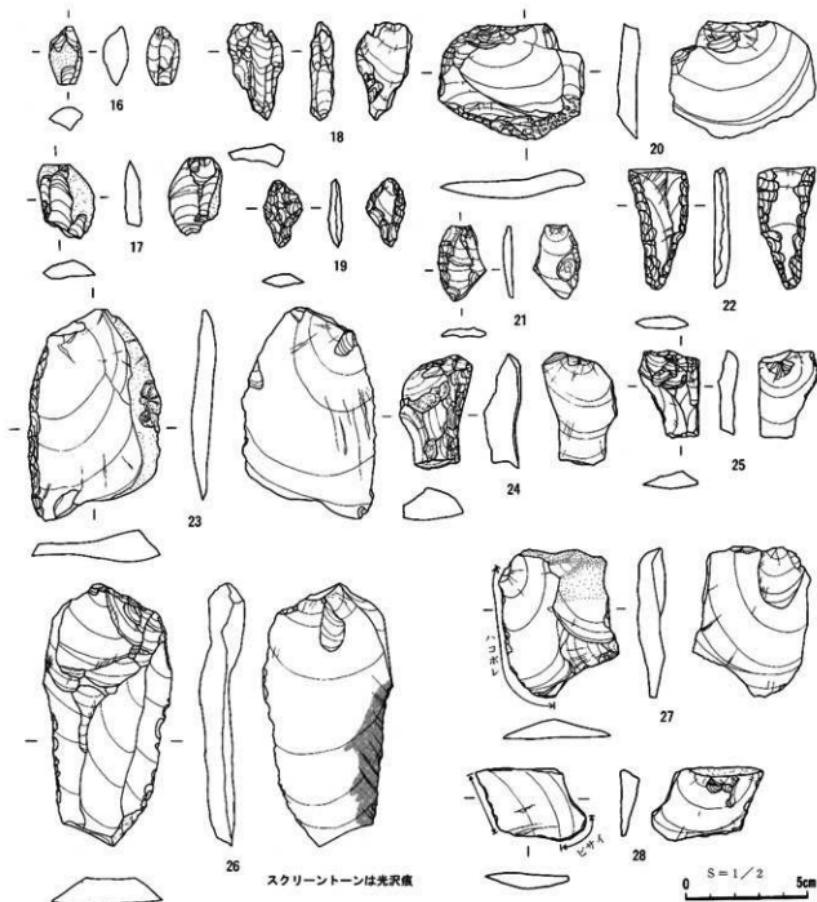
遺構外から2点出土した。石質は、2点とも凝灰岩である。加工及び使用の状況から、平安時代以降のものと思われる。

（畠山 昇）

スクリートーンは  
光沢感

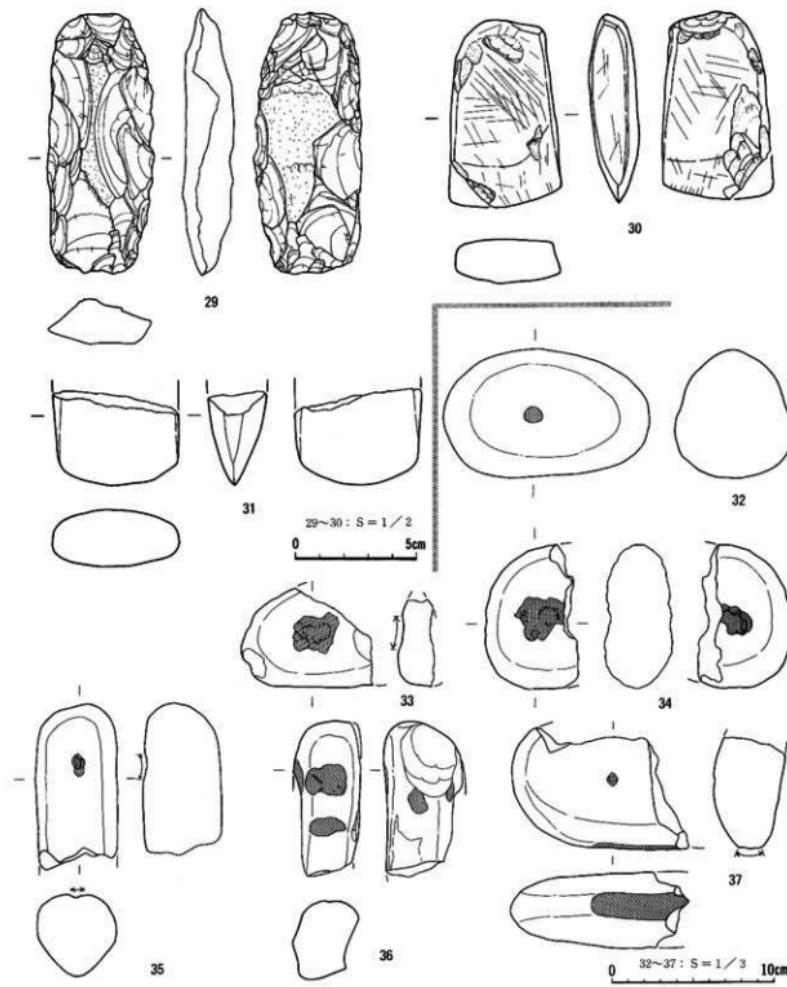
番号	出上地	層位	器種	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	石質	備考	整理番号
1	I R - 75	Ⅳ	石鏃	33	13	4	1.3	珪質頁岩	凹基	2
2	I R - 77	Ⅳ	石鏃	28	19	4	2.2	珪質頁岩	三角形	4
3	I V - 77	I	石鏃	35	14	5	2.1	珪質頁岩	T基。ピッチ付着	6
4	I P - 77	N	石鏃	32	16	6	2.3	珪質頁岩	Y基	5
5	I N - 56	N	石鏃	(26)	11	4	(1.1)	珪質頁岩	基部欠損。Y基。	3
6	I S - 73	II	石鏃	(52)	16	8	(6.2)	珪質頁岩	Y基。基部欠損。	7
7	I R - 57	N	石鏃	31	15	4	1.4	黑曜石		8
8	I Q - 27	I	石鏃	27	18	6	2.6	玉髓質珪質岩		17
9	I T - 77	I	石鏃	51	55	14	23.4	珪質頁岩		19
10	I T - 76	I	石鏃	91	34	11	37.7	珪質頁岩	範型	18
11	I T - 72	I	石鏃	54	32	6	7.5	珪質頁岩		11
12	I T - 73	I	石鏃	42	15	10	6.2	黑曜石	範型	10
13	I O - 77	I	石鏃	73	27	20	33.5	珪質頁岩		13
14	I N - 56	N	石鏃	(40)	39	(14)	(23)	珪質頁岩	刃部片	16
15	I R - 78	I	石鏃	86	38	13	43.6	珪質頁岩	直刃	14

図21 遺構外出土石器1



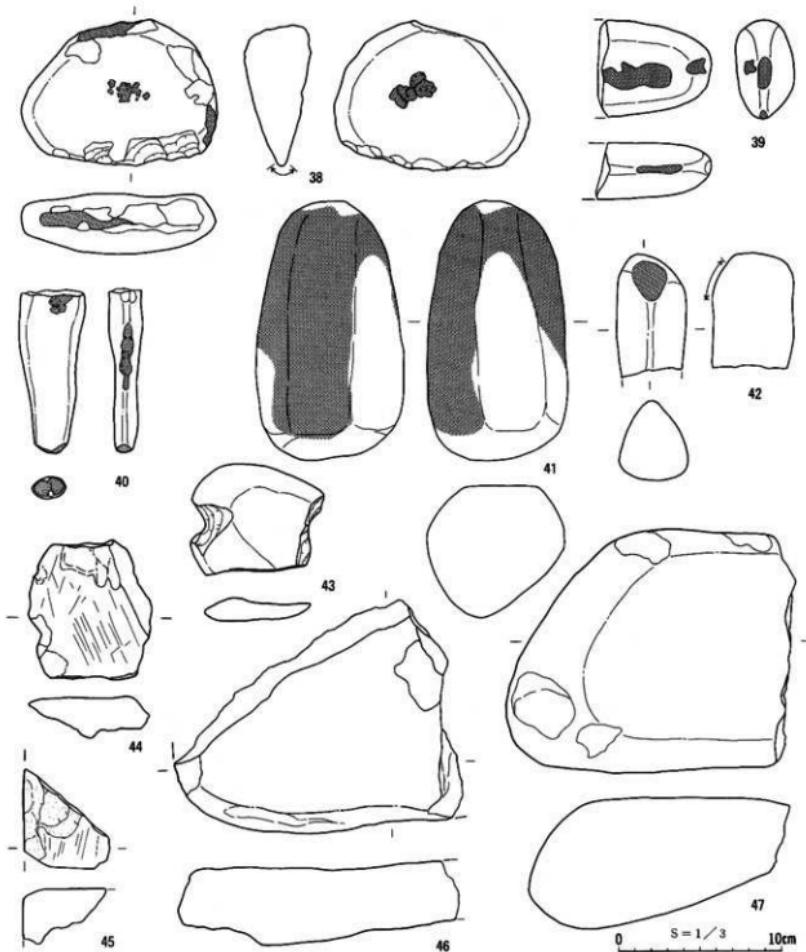
番号	出土地	層位	器種	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	石質	備考	整理番号
16	I R-82	I	搬形石器	23	14	11	3.6	珪質頁岩		33
17	I Q-27	I	搬形石器	31	22	7	5.8	珪質頁岩		32
18	I O-76	I	搬形石器	40	21	9	7.4	玉緑質珪質頁岩		47
19	I Q-27	I	スクレイパー	26	16	6	2.2	珪質頁岩		1
20	I R-75	III	スクレイパー	47	60	8	27.7	珪質頁岩		20
21	I R-72	III	スクレイパー	30	19	4	2.3	珪質頁岩		89
22	I T-85	I	スクレイパー	49	23	5	6.4	珪質頁岩		21
23	II F-96	IV	スクレイパー	73	54	13	50.8	珪質頁岩		22
24	I S-74	III	スクレイパー	45	21	13	16.6	珪質頁岩		23
25	I S-87	I	Rフライク	36	25	8	5.7	珪質頁岩		30
26	西区表塗		Rフライク	99	52	11	80.2	珪質頁岩		39
27	I S-79	N*	Uフライク	61	46	12	29.9	珪質頁岩		28
28	I O-76	III	Uフライク	29	34	8	9.6	珪質頁岩		27

図22 遺構外出土石器 2



番号	出 土 地	層位	器 物 様	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	石 質	備 考	聖理番号
29	I S - 80	II a	打製石斧	106	43	19	112.4	珪質頁岩	直刃	15
30	I R - 59	II	磨製石斧	78	46	19	119.0	綠色細粒矽灰岩	はげ完形	55
31	I T - 77	II	磨製石斧	(38)	(52)	(24)	(58.5)	閃綠岩	刃部片	57
32	I U - 74	Ⅲ	敲砸器	124	75	75	898	安山岩	凹石	70
33	I R - 71	II	敲砸器	(81)	(62)	(21)	(106.8)	電気石	凹石破片、被熱	61
34	I R - 75	Ⅲ	敲砸器	(88)	(52)	(44)	(244.7)	安山岩	凹石。向面に凹孔	66
35	I O - 75	Ⅲ	敲砸器	(101)	49	49	(327)	石英安山岩	凹石。神狀	63
36	I R - 86	II	敲砸器	92	47	44	241.7	石英安山岩	4箇に凹孔(敲打痕)	69
37	I Q - 79	II	敲砸器	(95)	(65)	(43)	(385.3)	安山岩	磨石。被熱	62

図23 遺構外出土石器3



番号	出土地	層位	器種	縦	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	石質	備考	整理番号
38	II F-95	IV	槌磨器	120	87	40	—	508	鞍山岩	磨石	86
39	II F-94	III	槌磨器	(70)	(60)	(36)	(197)	—	凝灰岩	磨+凹。残1/2~1/3	67
40	I V-76	I	槌磨器	101	40	21	—	91.5	鞍山岩	端部に打痕。平坦部に凹孔	78
41	I P-76	IV	槌磨器	158	90	78	—	1,533	鞍山岩	太い棒状。側面に敲打痕	71
42	I R-61	III	槌磨器	(74)	50	42	(255.7)	—	石英安山岩	敲石。先端に敲打痕	65
43	I N-70	IV	石鎌	79	65	16	—	79	細粒凝灰岩	—	72
44	I P-75	II	砥石	83	75	30	—	175.9	凝灰岩	平安時代	81
45	I O-75	II	砥石	—	—	—	—	(80.2)	凝灰岩	—	64
46	I U-71	I	台石	177	137	45	—	1,180	石英安山岩	破片。平安時代	83
47	I V-77	I	台石	169	150	77	—	2,953	石英安山岩	—	88

図24 遺構外出土石器 4

## 第4章 まとめ

今回の調査で検出した遺構は、住居跡2軒、土坑2基、溝状土坑1基、土器埋設遺構1基、焼土状遺構1基である。このうち、住居跡1軒（第2号住居跡）と土坑1基（第2号土坑）は調査区域外にかかっていたため、全部を調査出来なかった。

住居跡は、縄文時代中期のものを第1号住居跡、平安時代のものを第2号住居跡として調査した。第2号住居跡については、大部分が調査区域外にあって北側の一部分しか調査できなかつたが、そのわりには鉄滓や羽口片が多量に出土した。このことから、鉄または鉄器の生産に関係した遺構の可能性もある。そのため、今後の調査では本住居跡だけでなく、周辺地域の調査においても、十分な注意が必要と思われる。

出土遺物では、縄文時代前期・中期・後期・晚期、弥生時代、平安時代の遺物が出土した。縄文時代の土器では中期の円筒上層式に属するものが多く、他は少数である。弥生時代の土器は、縄文時代中期の遺物に次いで多い。平安時代の遺物はほとんどが住居跡からのものである。

今回の調査区域の南側には広い台地が広がっており、遺構や遺物が多数存在している可能性が高い。調査区域の南側も路線内に含まれており、いずれは調査が行われる予定である。今後の調査に期待したい。

（畠山 昇、工藤 由美子）

### 〈引用・参考文献〉

青森県教育委員会	1977	「近野遺跡（III） 三内丸山（II）遺跡」	青森県埋蔵文化財調査報告書第33集
青森県教育委員会	1978	「三内沢部遺跡」	青森県埋蔵文化財調査報告書第41集
青森県教育委員会	1979	「細越遺跡」	青森県埋蔵文化財調査報告書第49集
青森県教育委員会	1982	「山崎遺跡(1)(2)(3)」	青森県埋蔵文化財調査報告書第68集
青森県教育委員会	1984	「一ノ渡遺跡」	青森県埋蔵文化財調査報告書第79集
青森県教育委員会	1984	「弥栄平遺跡(2)」	青森県埋蔵文化財調査報告書第81集
青森県教育委員会	1984	「牛ヶ沢(3)遺跡」	青森県埋蔵文化財調査報告書第86集
青森県教育委員会	1984	「大石平遺跡」	青森県埋蔵文化財調査報告書第90集
青森県教育委員会	1986	「大石平遺跡II」	青森県埋蔵文化財調査報告書第97集
青森県教育委員会	1987	「大石平遺跡III」	青森県埋蔵文化財調査報告書第103集
青森県教育委員会	1988	「上尾駿(2)遺跡（I）」	青森県埋蔵文化財調査報告書第114集
青森県教育委員会	1989	「富ノ沢(1)・(2)遺跡」	青森県埋蔵文化財調査報告書第118集
青森県教育委員会	1989	「館野遺跡」	青森県埋蔵文化財調査報告書第119集
青森県教育委員会	1992	「富ノ沢(2)遺跡VI」	青森県埋蔵文化財調査報告書第147集
青森県教育委員会	1994	「家ノ前遺跡II 腹架遺跡II」	青森県埋蔵文化財調査報告書第160集
縄文文化検討会	1988	「東北地方の弥生式土器の編年について」	
須藤 隆	1990	「東北地方における弥生文化」『考古学古代史論叢』	伊東信雄先生追悼論文集刊行会編
橋 善光	1983	「東北北部」「弥生土器II」佐原 真編	
三宅徹也	1994	「円筒土器」「縄文文化の研究3 縄文土器I」	
村越潔	1974	「円筒土器文化」	
脇野沢村教育委員会	1979	「家の上・外崎沢(1)遺跡」	脇野沢村文化財報告書第1集



作業風景



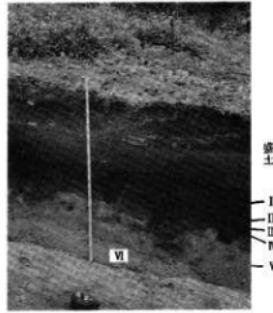
調査区全景



作業風景



作業風景

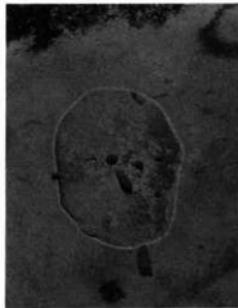


基本層序

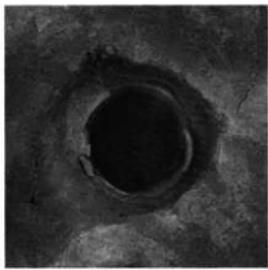
写真 1



西から



上空から



土器埋設炉



4-1



4-2



5-1



5-2



5-3



5-4



5-5



5-6



5-7



5-8



5-9



5-10



5-11



5-12



5-13



5-14



5-15



5-16

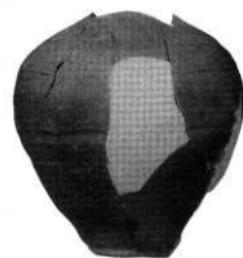
写真2 第1号住居跡と出土遺物



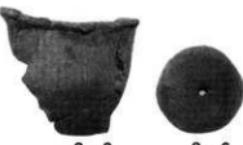
西から



カマド



8 -15



8 - 9

9 - 6



8 - 1



8 - 2



8 - 3



8 - 4



8 - 5



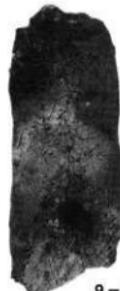
8 - 6



9-3



9 - 1

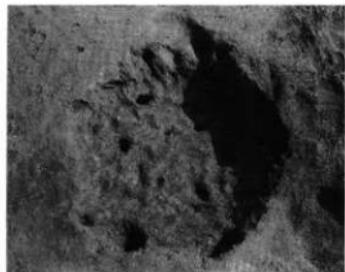


9 - 2

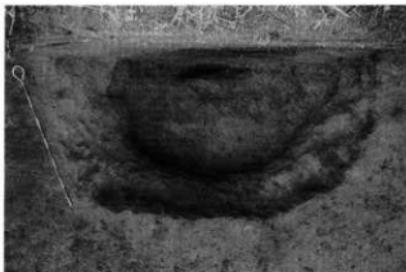


### 小さな鉄渾（精錬渾？）

写真3 第2号住居跡と出土遺物



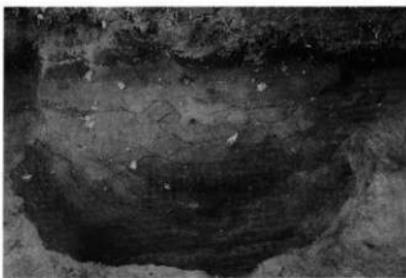
第1号土坑



第2号土坑

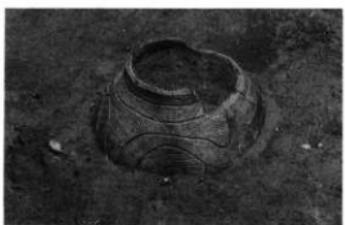
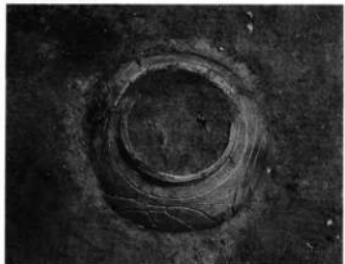


第1号溝状土坑



第2号土坑セクション

土器埋設遺構



10-4

写真4 土坑・溝状土坑・土器埋設遺構

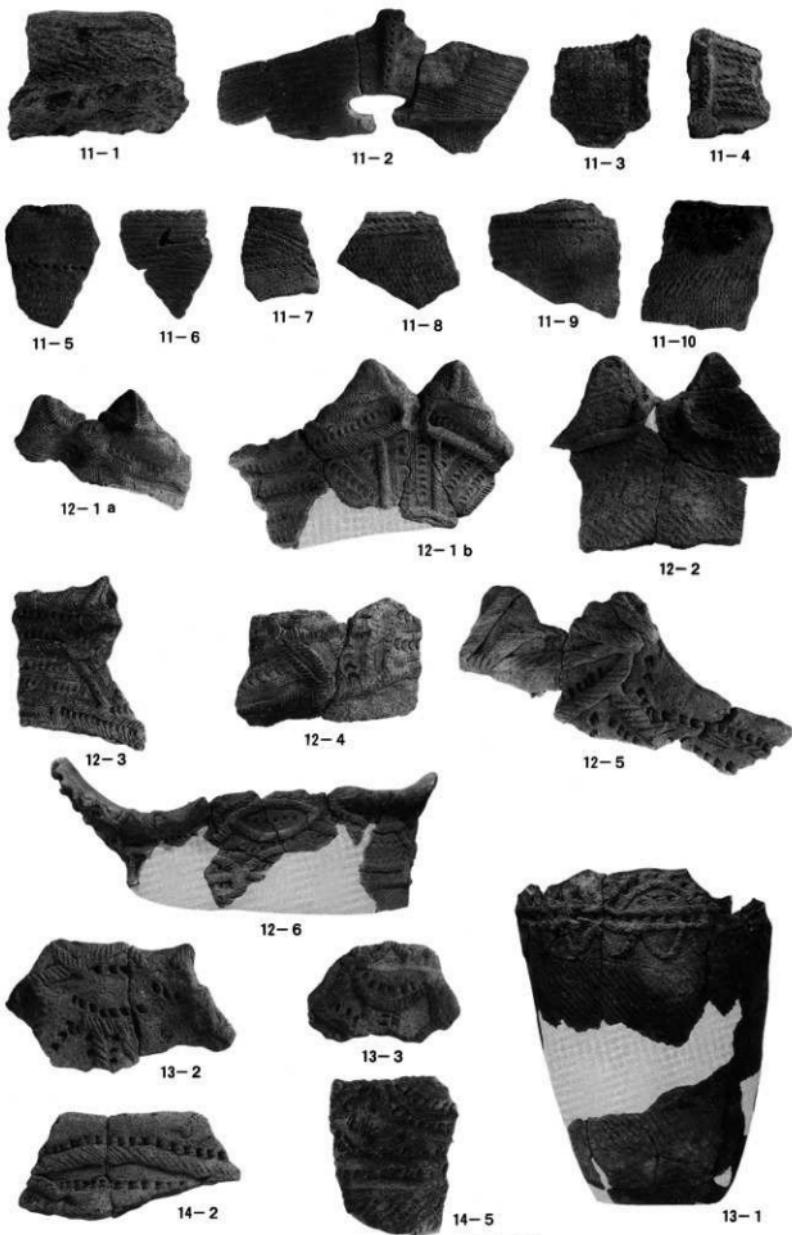


写真5 遺構外出土土器1（縄文時代）

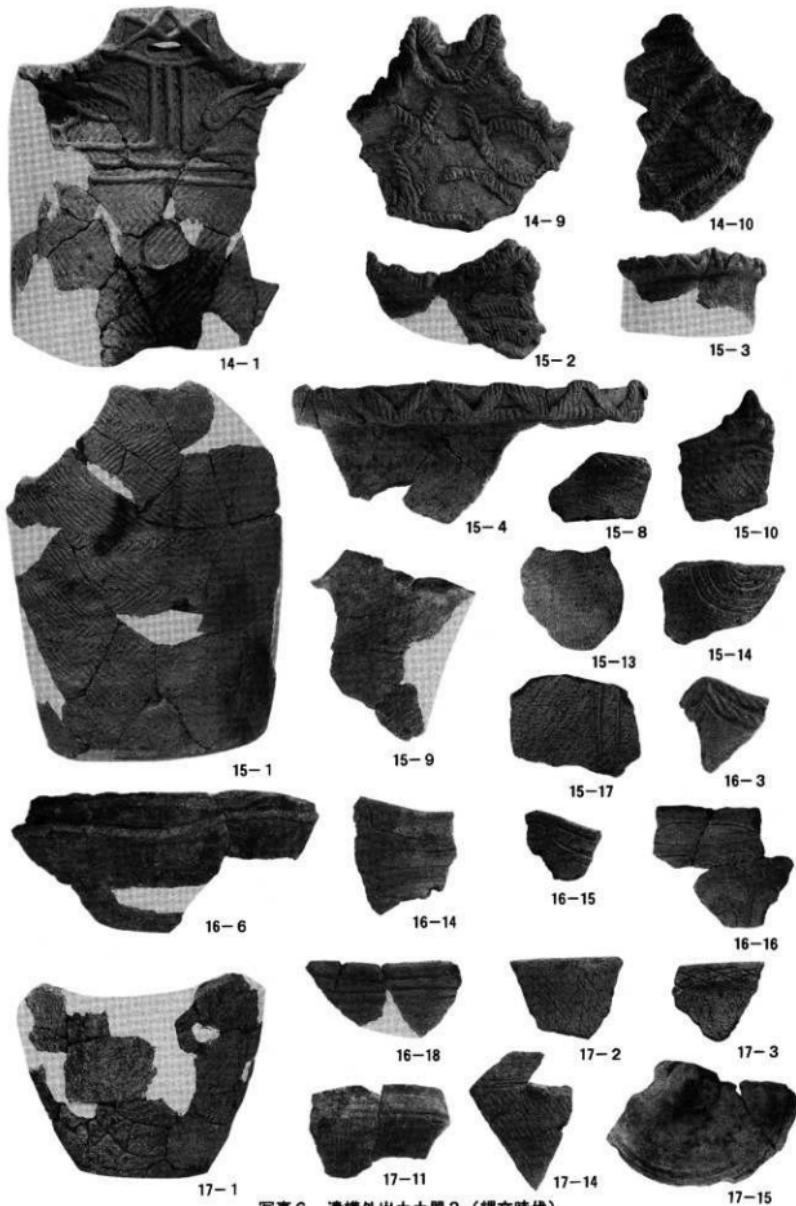


写真6 遺構外出土土器2（縄文時代）

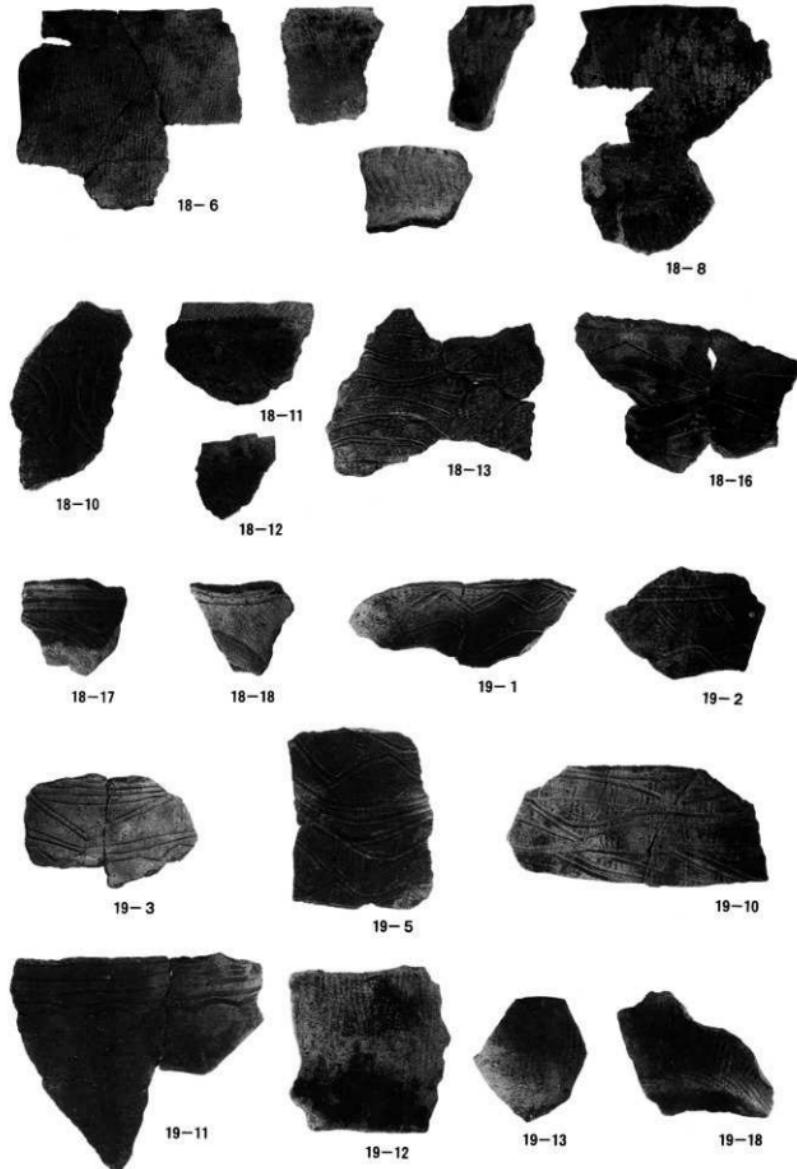


写真7 遺構外出土土器3（弥生時代）

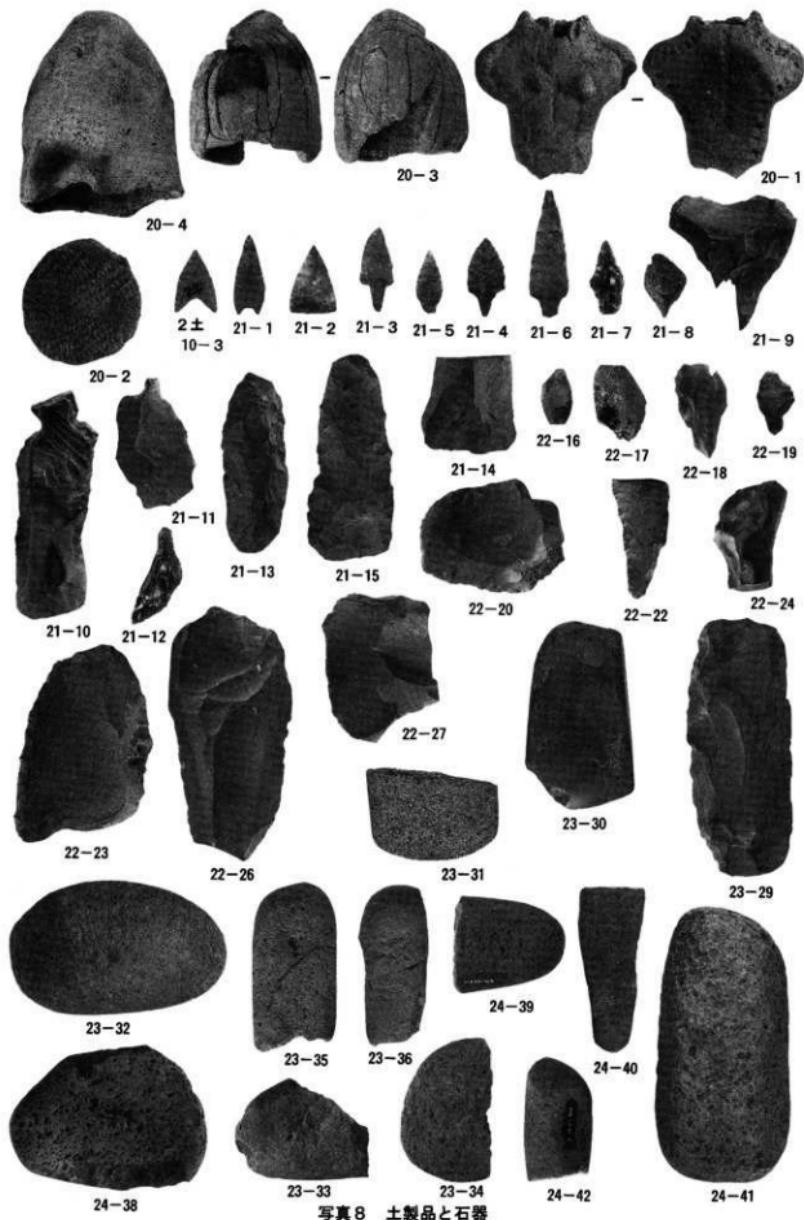


写真8 土製品と石器

## 報告書抄録

書名	安田(2)遺跡							
副書名	東北縦貫自動車道八戸線（青森～青森）建設事業に伴う遺跡発掘調査報告							
卷次								
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第255集							
編著者名	畠山 昇、工藤由美子							
編集機関	青森県埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒038-0042 青森市大字新城字天田内152-15 TEL0177-88-5701							
発行年月日	西暦1999年3月25日							
所取遺跡名	所在地	コ一ド		北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
安田(2)遺跡	青森県青森市 大字安田字近野 1-10	02201	01016	40° 47° 40.0°	140° 42° 24.6°	19970502 ～ 19970731	23,600	東北縦貫自動車道 八戸線（青森～青 森）建設事業に伴 う発掘調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物	特記事項	
安田(2)遺跡	集落跡	縄文時代 (前期～晚期) 弥生時代 平安時代	住居跡1軒（縄文中期） 住居跡1軒（平安時代） 土坑2基 溝状土坑1基	縄文時代中期の土器 ・石器 土偶・土製品 弥生時代の土器 平安時代の土師器・ 須恵器、鉄滓				

青森県埋蔵文化財調査報告書 第255集

**安田(2)遺跡**

—東北縦貫自動車道八戸線（青森～青森）  
建設事業に伴う遺跡発掘調査報告—

発行年月日 1999年3月25日

発 行 青森県教育委員会

編 集 青森県埋蔵文化財調査センター

〒038-0042

青森市大字新城字天田内152-15

T E L 0177-88-5701

F A X 0177-88-5702

印 刷 所 高金印刷株式会社

〒038-0015

青森市千刈二丁目1-30





活彩あおもり  
—輝くあおもり新時代—